

---

# 執事ハヤテの日々

悪霊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

執事ハヤテの日々

### 【Nコード】

N7697D

### 【作者名】

悪霊

### 【あらすじ】

いつものごとく、仕事をしていると突然、ナギが現れて・・・

## 1 話（前書き）

少しながくなるかもしれませんがぜひ見守ってください

## 1話

三千院家で働く執事綾崎 ハヤテ

いつものごとく、部屋の掃除をしていてハヤテはふうと息を吐き

「今日も静かで気持ちなあゝ」

というと共にアレギみの主ナギが入ってきた。

「アレギみなんだ？アレギみって」

つまり、H I・K I・K O・M O・R I ってやつだ

「ひきこもり言うな！！」

「お嬢様、誰と話しているんですか？」

「あ、いや・・・なんでもない」

「そうですか・・・それよりなにかようですか？」  
と聞くと

「うむ、ハヤテ！1つ質問していいか？」  
と言ったナギに

「あ、はい・・・いいですよ」

とハヤテは笑顔で答えた。

このあと、自分に事件が起るとも知らずに・・・

「じゃあ、ハヤテは誰のことが1番好きなんだ？」  
これにはハヤテも驚いたが

「えーと、1人答えないといけませんか？」

と聞いた

「うむ、1人答えてくれ」

その言葉に考え、悩んでいたが

「僕は、マリアさんが好きです」

とはっきり言った。

その言葉にナギは啞然としていたが、

やがて怒っているのか、泣いているのか分からない声で

「ハヤテの、ハヤテの・・バカー」

そういつて物を投げつけた後、クラウスを呼び

「やはりクラウスの言うとおり新しい執事を雇おう

ハヤテ、お前はクビだ」

そういうとナギはクラウスと共に部屋を出て行こうとした

「ちょっと、待ってください・・クビにしないでください」

「うるさい、お前はクビだ出てけ」

そういうとナギは部屋を出て行った。

ハヤテは啞然としていた

## 1 話（後書き）

少し短かったかな？まあこの後もこんな調子でつづきますのでよろしくお願いします

## 2話

ナギにクビにされ啞然としていると

マリアがすまなそうな顔をして現れたので・・・

ハヤテは我に返ってマリアに目を向けました

マリアは

「すみませんね、ハヤテ君」

「いえ、マリアさんがあやまらなくなつたていいですよ  
それよりどうなっているんですか？」

「実は・・・」

マリアは重い口を開け、  
全てをハヤテに話した。

クラウドとナギが執事のことケンカしていたこと  
その決着をつけるためナギが質問し

ハヤテの回答によって

どうするかを決めること

そして、全てを聞いたハヤテは自室に戻り  
屋敷を出て行く準備を始めた。

幸い荷物が少なかったため準備はすぐ終わった

マリアは心配して

「私からも伝えますからやめない方がいいんじゃないですか？」

と言って、引きとめようとしたがハヤテは

「いいんですよ。僕はお嬢様を騙していたわけですし  
それにお嬢様が出てけと言っているんですからいいんですよ」

ハヤテは何処となく悲しい顔をしていたがマリアにお別れをして  
屋敷から出て行きました。

ある1つの言葉を残して・・・

「少しの間だけでも幸せをありがとうございますお嬢様・・・」  
しかしそんなことを知らないナギは

三千院家の力でハヤテを社会的に葬った。

つまりバイトや職はできないということだ。

「ハヤテめ、私を裏切ったことを後悔するがいい」

とナギがいつていました

ハヤテはどうなるのか!?

死ぬのか??

それは次回に続きます



## 2話（後書き）

少し短いかな・・

次回、重要なオリキャラがでてきます

また、ハヤテもでてきます

### 3話

ハヤテが屋敷を出てから約1時間が経った。  
クラウスが新しい執事を連れてやってきた。

「どうも、よろしく願います」

彼の名前は堺 煉<sup>れん</sup>。

あらゆる武術を使える世界でも  
有名な執事である。無論オリキャラである。

「うむ、頼むぞ」

「はい、お任せください」

その様子にクラウスも気分が良さそうだ。

しかし、マリアだけは違った目で見ていた。  
なぜならクラウスも知らないが煉は  
これまで何回も問題を起こして執事をクビ  
になっていたからだ。

そのころ、ハヤテはというと借金取りに追いか  
けられていた。

その理由は、ナギがいつかの借金取りに  
ハヤテを売っていたからである。

しかし、いくら借金取りといえど  
ハヤテに追いつけるわけもなく  
ハヤテはあつという間に  
逃げ切っていた。

しかし、問題は三千院家でも起こっていた。  
雇った執事の煉が早くも問題を起こしていた。  
さらに、仲直りのメドが立たず困り果てていた。

その頃、ハヤテは借金取りから隠れていた。  
そして、息をつくと、

「お嬢様、大丈夫かなあ」

こんな状況でよく人の心配なんかできるなと  
思いつつも、ハヤテの呟きをしばらく聞くことにしよう。

「あー、今頃執事を雇っているんだろな」

「でも、お嬢様のことだからもう執事の人と  
ケンカしてるかも」

といって、クスツと笑っていました。

なんという洞察力。

「まあ、そんなこんなで仲良くなっているんだろうなあ」  
というハヤテは寝てしまっていた。

そんな彼に近づく怪しい影。

はたしてその影の正体とは！？

### 3 話（後書き）

皆さん、どうでしたか？

少し短かったような気もしますが、

次回はハヤテが変わります。

あとオリキャラもでてきます

## 4話

まあ、いろんなことがあったその翌日。  
ナギと煉は一応仲直りをしていた。

「いいか、これからをもっとしっかりしてくれよ」

「わかりました」

「しっかりやってくれないと困るだからな」

「はい」

「でも、お嬢様も負けず嫌いですねえ」

「負けず嫌いではない!!」

そんな会話をしていると、ある人物が入ってきた。

「朝からうるさいなお前ら・・・」

「あ、竣」

「竣兄さん」

「峻様」

とナギ・マリア・クラウドがいった。

彼は三千院 竣。ナギの兄である。

彼は入ってくるなり、

「ん？誰だそいつ、ハヤテはどうした？」

その言葉にナギ達は黙った。

煉にはなぜ黙ったかわからなかった。

ハヤテは竣にも執事をやっていたし、

竣はハヤテのことを信頼している。

さらに、ハヤテが執事になることを

最初に認めていた。

だから、竣に無断でハヤテをクビにした

とはとてもじゃないが言えなかったのだ。

しかし、そんなことを知らない煉は

「前の執事ならやめましたよ」

その言葉に、峻は拳を震わせて

「マリア、それは本当か？」

マリアは、ハヤテに話したことと同じことを話しました。

全てを聞くと、峻はナギとクラウドの方を向きました。

「ごめんなさい、」

と謝りましたが、峻は少しうなだれたようにしながら、

「この手紙は本当だったのか・・・」

「なんの手紙なの？峻」

「ハヤテからさ」

というと峻は椅子に座り、その手紙を読み始めた。

その内容は短いながらも感謝の言葉でいっぱいでした。

読み終わると、峻は

「どんなに、ハヤテがお前に感謝してたかお前はわからんだろうな

たわいもない理由で人の命を捨てるなんてお前はハヤテの親

と同じだ!!」

そういい終わったあと、峻は部屋を出て行きました。

その頃、三千院家へ向かっていたヒナギクは

途中でハヤテを見つけました。

声をかけようとしたが様子が違います。

なぜなら、いつもと違う服を着て

後ろに黒服の3人をつれていたからである。

ハヤテらは車に乗っていったので  
ヒナギクは急いで向かいました。

「なんだって？ハヤテが？」

「ええ、そうよ」

そういったヒナギクは窓を見上げていました。

竣はナギたちを連れてハヤテを探すことにしました。

#### 4 話（後書き）

どうでした？

次回は戦いシーンなどが入ると思います。



## 5話

5人（竣、ナギ、マリア、ヒナギク、煉）はハヤテを探していた。

「クソッ、どこにいったんだ？」

竣は苛立っていたが、

「たぶん、ここの近くにいますよ」

とヒナギクがいった。

すると、目の前に先ほどの黒服3人を発見した。

「あ、ハヤテ君といっしょにいた3人」

というと竣は声をかけた。

「お前ら、ハヤテを見なかったか？」

「あ？しらねえな」

という3人は日本刀を持って襲って来た。

竣と煉はあっという間に倒した。

「さあ、ハヤテの場所を教えてもらおうか」

と竣がいうといきなり向こうから声が聞こえた。

「おい、なにやってんだお前ら」

「ん？こりゃーびつくりだな」

というと近ずいてきた。

煉はいきなり前に出て戦う構えをした。

「お？やるのかお前」

というといきなり空間が変わった。

「ここは・・・閉鎖空間か？」

「ほう、これが分かるとはな」

というハヤテは早くやろうぜといった。

煉は正宗を出した。

「あれ？それは確か正宗だな」

しかし煉はそれを真剣へと変えた。

「ほーう、真剣か・・・ならば」

というと剣を出した。

「それはなんだ？」

「これはな大包平だ」

大包平は世界でもっとも強い真剣である。

そっとうとハヤテは前に飛び出し、

あっという間に煉を斬った。

「安心しな、閉鎖空間での出来事は

現実世界には影響しねえからよ」

というとハヤテは閉鎖空間を閉じた。

ハヤテは閉鎖空間を出るとそのまま

向こうへ歩いていく。

「おい、待て」

ナギが叫んだ。

すると、煉は起き上がり

「待て」

と言ったが、ハヤテは

「煉とか言ったな・・・お前も気付けな

いつあのわがままな主に捨てられるか分かんからな」

というとハヤテはそのまま去っていった。

## 5 話（後書き）

どうでしたか？

次回でなぜ変わったのかを出します

ありきたりになってきてるかもしれないので

つまらないかもしれませんが

これからお願いします

## 6話

竣達はハヤテが去ったあとすぐ屋敷に帰ってきた。

ちなみに、煉は勝負に負けたショックから執事を辞めていた。

帰って来てはいいがナギはさつきから黙り込んでいた。

ハヤテにいわれた言葉が頭から離れず

マリアらの言葉はナギにまったく聞こえていなかった。

「（心の中）やはり私は間違ったことをしたんだろう。ハヤテに悪いことをしたな・・・どうすればいいんだ」

ナギは心の中で自分をいじめていた。

「私は悪いやつだダメな奴なんだ・・・

人の気持ちを考えず行動するバカ者なんだ

私はこの世から消えた方がいいんだ。」

そう考えていると、自分と呼んでいる声が出た。

ふと、我に返ると、マリアがほっとした顔をしていた。

峻は、黙っていたがこう言った。

「ナギ、自分だけで責任を負うな・・・

あれはハヤテじゃない。分からないが俺にはなんとなくそう感じた」

確かに、いままでのハヤテとは違った。

そのあとナギ達は黙っていたが、いきなりSPが入ってきた。「お嬢様方、先ほどこのような手紙が届いてました」

それを聞くと峻は手紙を受け取りしばらく読んでいましたが

「なんてこった、これはやばい」

「何が書いてあるの？ 峻」

とマリアが聞いた。

「これを見てください」

「三千院家の方々へ」

久しぶりだな．．．．よくもクビにしてくれたな

お前らは許さない．．．だから、お前らは襲わんが  
お前達の親族、友達など親しい者達を襲っていく。

何もせず、親しい者が次々倒れてく姿を見ているがいい

綾崎　ハヤテより」

「急げ、帝のじいさん、愛沢家、鷺宮家、それとヒナギクなどに伝える。」

ナギはしばらくその場から動けなかった。

その頃、愛沢咲夜と鷺宮伊澄は三千院家へと向かっていた。

「まあまあ、ウチが連れてってあげるさかい心配せんでええよ」

「別に咲夜に連れてってもらわなくても．．．」

すると、伊澄は気配を感じたのか後ろを向いた。

その瞬間、前に現れたハヤテが咲夜を剣で斬った。

伊澄は前を向きとつさに相手を見たがハヤテは見られるとすぐ逃げていった。

「咲夜、咲夜．．起きて」

「うう．．伊澄さんなにがあつたんや．．」

咲夜は血がどんでんでいた

このままでは、まずいと思った瞬間三千院家のSP達がやってきた

「大丈夫ですかー」

「咲夜が怪我をしています」

伊澄は運ばれた咲夜と一緒に三千院家へ向かった。

「なに！？咲がやられただと」

「ええ．．幸い傷は浅かったみたい」

「よかった・・・」

安心したような顔を見せていたが、

「でも、どうしたの？」

と言う伊澄の言葉にまた顔が暗くなつたが

伊澄に全てを話した。伊澄は聞いたあと、

先ほど、見たことを話した。

「ナギ、ハヤテ様は悪霊に乗っ取られてるのよ」

その言葉にナギは驚いた。

「本当か！？」

「ええ、本当よ。ハヤテ様は何もしてないのよ」

「でも、それをまず言つたということは伊澄にも除霊できんのだな」

と竣が言つた。ナギは伊澄が霊が見えたり退治できたり

するのを知っています。

「ええ、そうなんです」

「とにかく、それが分かつただけで十分だ

どう対処するかはあとで考えることにしてヒナギクも呼んで

ここに皆でいれば攻撃できないだろう。」

と言つた竣に皆は賛成した。

その30分後、竣の部屋に集まっていた。

## 6 話（後書き）

皆さん、どうですか？

今まで短かったので今回は少し長くしてみました。

まあ、展開が微妙だし、脱字誤字はありますが  
かんべんしてください。

次回はなるべく脱字誤字がないようにやっていきます

## 7話

三千院家に皆が集まった頃、ハヤテは屋敷の近くにいた。

「ちっ、全員で固まったか・・・」

「これじゃ攻撃できんぜ。どうするかな」

さすがに、攻め込むのは無理と判断し、方法を考えていたが急に、立ち上がり

「じゃ、行きますか」

といって、屋敷の方へ向かった。

その頃、屋敷にいたナギたちはというと・・・

「ねえ、本当に大丈夫なの？」

ヒナギクは聞きました。すると、SP達が、

「心配いりませんよ。警備は万全ですから」

そう自信を持って言いました。

なぜなら、今回に備えSPの数を4倍にしているし警備ロボを強化していたからである。

しかし、ヒナギクは・・・

「なんか嫌な予感するんだけど・・・」

と心配していた。しかし、その予感は的中していた。

「ふん、甘いんだよ。お前らじゃ俺は倒せんぜ・・・引っ込んでな」

ハヤテはあつという間に屋敷の警備ロボを避けていた。

「さて、行くか。どこにいくかな・・・たぶん

固まってるだろうから1人になったとき狙うか」

と言うと、ハヤテは屋敷へと入っていた。

そんなことを知らない、ナギ達は部屋で過ごしていました。

マリアが

「皆さん、お腹減ってるでしょうし、なにか作ってきますね」



と言うと、ヒナギクが

「1人じゃ危ないので私も行きますよマリアさん」

マリアとヒナギクは、厨房へと向かった。

しかし、2人は気づかなかった、ハヤテがいていることを厨房に着くと、2人は料理を始めました。

「マリアさんと話すのも久しぶりですね」

「ええ、最近忙しかったから話す機会はなかったですよね」  
そんなたわいもない話をしていると

「あら？砂糖がないですね」

とヒナギクが言った。

「あ、近くの倉庫にあるんで取ってきますよ」

と言うと10mほど離れた倉庫へ取りに行ったがハヤテがこのチャンスを逃すわけがなかった。

「きゃあああああああ！」

あっという間に斬るとハヤテはすぐ去って行った。

マリアの声にヒナギクが走ってきた。

「大丈夫ですか？マリアさん」

その後から、ナギ達が出てきた。

「マリア、大丈夫か？返事をしてくれ」

しかしマリアは何も返事しない。どうやら気絶しているようだ。  
傷は肩からお腹の部分まであり、早くしないと出血多量で死んでしまう。

すぐにマリアは医務室へと運ばれた。医師はこう言った。

「先ほどの方より傷が深いです、もしかしたら助からないかもしれません」

その言葉に、皆は凍りついたが、マリアは幸い大きな怪我もなく助かるとの報告が入ると、全員ほっとしたような顔をした。



## 7 話（後書き）

とりあえず、自分で言うのもなんなのですが  
話がよくわからんです。

内容が分からなかったらすみません  
では次回、お楽しみに

## 8話

マリアが助かって30分後、竣達は部屋で相談していた。

「やはり、常に3人行動した方がいいな」

「だな、マリアも1人になったところを狙われてるし」

「でもこのまままってもなあ」

「いつそのこと賭けてみる？」

真剣に話あっていたため気づかなかったが

実は会話を聞かれていたのだ。

「ふーん、3人で行動されたらきついな」

ハヤテはそういつて聞いていた。

話し合いはしばらく続いたが

結局、3人で行動することとなり様子を見ることとなった。

メンバーは（竣、ナギ、ヒナギク）（伊澄、ワタル、咲夜）です

ちなみに咲夜は軽い怪我だったので治ったということでお考えください。

「じゃ、トイレ行ってきますね」

と伊澄が言った。

咲夜と伊澄がトイレへと入ってワタルだけが残った。

しかし、これが最悪の事態を招くこととなる。

ワタルは疲れていたのでブーツとしていた

しかし、これが命取りとなった

いきなり出てきたハヤテに気づくのが遅れ、斬られてしまった。

その場にワタルは倒れるのを見届けるとハヤテは

足早に去っていった。

その数分後、伊澄と咲夜が出てくると驚いた、2人は思いっきり叫んだ。

「きゃあああああ！！」

その声に驚いて竣達があわててやってきた。

「どうした、何かあったか？」

「ワタル君がやられたみたいです」

その言葉を聞くと竣はワタルの脈を計った。

「こ・・・これは」

「どうしたの？」

「もう死んでる・・・」

それは一瞬だった、ワタルは心臓の付近を斬られていたため斬られて倒れた瞬間にもう死んでいたのだ。

ついに死人が出てしまった。もうこれ以上ハヤテを逃がしとくわけには

いかなかった。すでに2人を怪我させ、1人を殺しているのだから・・・

しばらく竣達は動けなかったがハヤテを探すことにした。

しかし、動揺していたのは、竣達だけではなかった。その人物はもちろんハヤテだった。

なぜなら、確かに襲うと言ったが殺すつもりはまったくなかったからだ

「クソッ、まさか死んじゃうとは思わなかったぜ。殺したからには俺は生かしとく訳はねえだろうな・・・どうするよこれ」

ハヤテはしばらく考えていたが、すつと立ち上がり、

「仕方ねえ、捕まってもいい、やれるとこまでやるか」

そう言うと、ハヤテはその場から離れた。

一方、ナギらは話し合っていた。

「たぶん、今までの話は聞かれているだろう  
周りに注意してハヤテを探せ!!」

皆は頷き、手分けして探した。

ハヤテも次の相手を探していた。すると、目の前にヒナギクが1人で立っていた。

「ふん、隙がありすぎだな・・・死ね!!」

そう言つて、ハヤテは近づいた。しかし

「かかったわね」

とヒナギクが言った瞬間にハヤテは罠にかかってしまった。

「うわ、なんだこれ？」

ハヤテは大包平で斬ろうとしたがまったく斬れない。

「ふふ、そのロープはどんな刀でも斬れないようにしてある  
あばれても無駄だよ」

と言ったあと他の人は出てきた。

「ヒナギク、ありがとう」

「これぐらい、いいのよ」

と会話をしていると

「竣兄さん、ハヤテはどうする？」

とナギが言った。

「ふふ、見事に捕まってるね・・・さて

お前はどうするかな？警察にだすか？」

そういつてみんなの意見を聞いていると、

急に、ハヤテがもがき始めた。

「ぐわああああ、頭がああああ」

と叫んで頭を抱えていた。

「なんだ、大丈夫か!？」

しかし、ハヤテはさらにもがいていた。

「誰か助けてくれ・・・貴様なぜ出てこれた・・・」  
と言つとハヤテはばったり倒れた。

どうやら気絶したらしい。

峻達はしばらく啞然としていたが我にかえると

「ふう、どうする？」

「まあ、とりあえずこのままにしとくのもダメだからな・・・

おい、こいつを罾から外し部屋に連れてけ」

と言うと、SP達がやってきてハヤテを罾から外し

部屋へと運んでいった。ヒナギクは

「ねえ、また起きて逃げたらどうするの？」

「いやそれはないだろう、さっきいただろう？」

ハヤテには別の人格が入っているって

たぶん、いまのは封じられていたハヤテが

出てきたんだろう」

「なるほどね、だからさっき（貴様なぜ出てきた）

って言ったのね」

「そうだ、今はハヤテが目を覚ますのを待とう」

と言うと、峻達はハヤテが寝かされている

部屋へと向かった。

## 8話（後書き）

皆さんどうでしたか？

一応、区切りでここまでにしました

さて次回は1区切りにするつもりです



## 9 話（前書き）

今回、ハヤテが死ぬという形で  
1 区切りつけたいとおもいます

## 9 話

ハヤテが寝かされている部屋に着いた竣達は  
ハヤテが目覚ますのを待った。

その頃、ハヤテはというと・・・。心の中でさまよっていた。

「うーん、ここはどこだろう？なんでこんなところにいるんだ？」  
すると、声が聞こえた。

「おい！俺をこんなところに封印しやがって出しやがれ」

「あなたは誰ですか？なぜここにいますか！？」

その言葉に声の人は黙った。

なぜなら、この人はハヤテをあやつり人殺しをやった  
張本人だからである。

「いやー、気がついたらここにいたんですよ。

（マズイ、ここで乗っ取って人殺しなんかしたってバレるわけには  
いかない）」

「えー、そうなんですかー大変ですね」

ハヤテは相手を氣遣った。

「ああ、そうなんだ。助けてくれないか！？」

「ええ、いいですよーちょっと待ってくださいね」  
と言うとハヤテは近づいていった。

「（ククク、また乗っ取ってやるぜ・・・それにしても単純な奴で助  
かったな）」

ハヤテはまた乗っ取られてしまうのか？とその時

「ハヤテ、その人を出しちゃダメだぞ」

その言葉にハヤテは振り向く。

そこには見覚えのある人物が立っていた。

「茜兄さん!!」

それはハヤテの兄であつた。相手は暗いところにいたのでよく見えなかったが

確かに兄であることは分かつた。

「茜兄さんなぜここに？」

ハヤテは聞いた。すると茜は

「ここはお前の心の中だ。そしてそいつはお前を乗っ取っていたやつだ」

「本当なの？兄さん」

「ああ、本当だ、そいつはお前を乗っ取り人殺しをした

すでに、咲夜、マリアと言う者に怪我を負わせ、ワタルと言う者を殺したのだ」

その言葉にハヤテは愕然とした。ハヤテは相手をにらみつけると

「あなたは本当にやったんですか？」

「いや、やってない、やってないよ」

ハヤテの後ろに黒い影が出てきた

「その鎖、貴方を封印してるだけじゃないんですよ

その鎖で貴方の脈を計れます。貴方は嘘をついていますね」  
相手は目が死んでいた。

「ふう、せめてやったことを素直に言ってくれれば

少しは許してあげたのに・・・やったにも関わらず

嘘について逃げようとするなんて貴方は許しませんよ絶対に」

「す・すまん、謝るから助けてくれ」

「そこで反省しているといいですよ」

というハヤテは振り返って

「兄さん、ありがとう危うくまた人殺しをやるところでしたよ」

「いいんだ、それよりはやく戻れ、今度は現実世界で会おう」

「うん、また後でね」

しばらくすると周りが明るくなってきた。

周りには人がいるらしく、声が聞こえた。

「ハヤテ、目が覚めたか・・・よかった」

「竣様・・・お嬢様・・・咲夜さん、伊澄さん、ヒナギクさん」

「良かったわねナギ」

「いや、それはその・・・別にハヤテのことなんか心配してないぞ」

「ナギ、あんなに心配してたじゃない」

「そうや、そんなに恥ずかしがらんでええやん」

ナギは顔が真っ赤だった。

ハヤテは思った。

「（あゝ、こういうの聞くの久しぶりだな・・・

でももう僕は執事じゃないんだよな・・・

もうこんな会話を聞くことはないだろうな・・・）」

このハヤテの考えていたことはあとで分かります

「ハヤテ？なにを考えてるんだ？」

とナギが顔を近づけて言った。

ハヤテは我に返るといきなり顔を赤らめた。

ナギは不思議に思った。それを見かねて竣が

「お前、なにがなんでもそれは顔が近づきすぎじゃないのか？」

ナギはすぐ顔を離れたが真っ赤になっている。

ハヤテも真っ赤になり下を向きつつもちろちらとナギを見ていた。

しばらく静寂が続いたがハヤテが

「ちよつと、考えごとをしたいので部屋から出てくれませんか？」

竣達は部屋から出て行った。ハヤテはふうとため息をつき

「僕はこれからどうするかな・・・このままいるか

出て行くかだよな・・・」

しばらく悩んでいたが何か決心したように机に向かい、

一心不乱に何かを書いていました。

その頃、竣達は部屋に戻っていました

マリアも怪我が治ったということでお考えください

「さて、そろそろ夕食ですし、何か食べたいわね」

「そういえばご飯をつくるといっていたがマリアが斬られたから結局食べられなかったな」

「じゃ、私がハヤテ君を呼んできますね」

マリアがハヤテのいる部屋の前に行き

「ハヤテくん、夕食を食べるので、出てきてください」

しかし、返事はないマリアは

「寝てるんですか、入りますよ」

マリアは部屋に入ったがハヤテの姿は見えなかった。

マリアは部屋を出て行こうとしたが机の上に一枚の紙があるのを見つけた。

その手紙はハヤテが屋敷を出て行くことを書いた手紙だった

「早くナギ達に伝えなくちゃ」

その10分後ナギ達はハヤテを探しに出かけた。

そのハヤテはというと、とある崖のところに来ていた。

「これでいいんだ僕は1度助かった命もうなんの未練も後悔もないんだ」

その時、ナギ達がハヤテを見つけ、こっちに走ってきた

「ハヤテ」

「やっぱり見つかりましたか・・さすがですね」

ハヤテはそういうと手紙を出し地面に置いた。

「ハヤテお前なにをするきなんだ？」

「ハヤテ君はやまらないでまだいきいけばいいじゃない」

「でもどうせ、いつ僕が乗っ取られて人殺しをするかわからないですし」

ハヤテの言うことはあたっていた、今は封印されているがいつ解け

るか分からないのだから

「でもお前が責任を負うことはないだろう」

「でもこの霊は伊澄さんも除霊できないだろうし、こうするしか方法がないですよ・・・」

ハヤテはそういつとうつぶいた。皆だまっていたがハヤテが「では、これでお別れです・・・最後に1つ言わせてください」

「お嬢様、僕は好きでした。屋敷を追い出されたときからお嬢様のことが気になってました。最後に告白できて良かったです・・・」

そういつたハヤテは顔が真っ赤だったが次の瞬間

ハヤテは崖から飛び降りた。ナギは、

「ハヤテえ」

思いつきり叫んだ。ナギは泣き崩れていたが崖の方へ行き

ハヤテが残した手紙を見た。それは1人1人に書いた手紙であった。「皆さんへ」

マリアさんへ

今まで迷惑かけてすみませんでした

これからいい人が見つかるといいですね

ヒナギクさんへ

いつも助けていただきありがとうございました

これからも皆の手本となって頑張ってください

咲夜さんへ

咲夜さんはいつも困っているとき助けてくれたり

する人なのでこれからもお嬢様をお願いします

伊澄さんへ

伊澄さんはお嬢様の親友ですのでお嬢様のことを  
1番分かっていて思うのでお嬢様をお願いします

竣様へ

竣様はいつも僕を気にしてくれていたし

これから皆さんを優しく接する心で頑張ってください

お嬢様へ

僕はお嬢様のことが好きでしたでも僕はもう

お嬢様を守ることができないですが

いい相手を見つかるよう見守っていきたいとおもいます

皆さんさようなら

幸せが皆さんにあることを願っています

綾崎 ハヤテより」

## 9 話（後書き）

ハヤテが死ぬシーンが微妙だと思いました

今回で1区切りつけて次回から

新しい話へ向かっていきます

ぜひ、お楽しみに

あ、それと感想書いてくれたらうれしいので  
ぜひ書いてください



10 話（前書き）

## 10話

ハヤテが死んで5年後、その後のそれぞれの人生を見ていきたいと思います。

まずは、咲夜……

咲夜は高校を卒業すると、単身アメリカへと留学し、今は向こうの大学で一生懸命勉強しています。また、向こうで同じ日本人の森 和哉と結婚しました。また、大学では日本での高校同様、男女とわず人気で勉強もクラスでダントツトップと勉強も順調に進んでいるようです。

今回はオリキャラがたくさんでるので次回からオリキャラを1人ずつ紹介していきたいと思います

続いて、伊澄……

伊澄はというと世界の困っている人を助ける団体を結成し、世界を回り、多くの困っている人達を助けている。また、今では迷子になることもなくなっており、1人で行動できるようになっっている。ちなみに現在はブラジルで活動中である。

次は、マリア……

マリアは5年も経っているのにもかかわらずまったく昔のままである

なぜ、彼氏ができないかという疑問は置いて  
マリアもナギが大きくなったこともあり  
自由な時間も増えたことをきっかけに  
今までしなかったことをするようになりました  
まあ、いっぱいありまするんでこれは後ほど  
書く場所があつたら書かせていただきます。

続いて、ヒナギクと峻・・・

なぜ2人いつぺんに言つたかというところ  
ヒナギクと峻が結婚しているからである。  
まだ、子供はいませんが峻いわく  
子供は1人は欲しいそうです  
ちなみに、ヒナギクは白皇学院の教師  
峻は白皇学院の理事長をやっています。

最後に、ナギ・・・

ナギはあいもかわらず引きこもり生活をしていた・・・  
とまあ冗談は置いてここ5年で見違えた  
帝から三千院家グループの権利を譲り請け  
資産を拡大させるなど大きな利益をもたらしたり  
スポーツも自らやるようになったり  
苦手だった家事をマジめにとりこんでいる  
特に料理の腕前はマリアに劣らないほどまで上がり  
ちよくちよく行つた社交界やパーティーで来た客を感動させ

るまで

成長しているのだから驚きだ  
しかし、人見知りはいかかわらずで執事にいたっては  
ハヤテのことがあるのかこの5年誰もついていないのだ

また跡継ぎを残さなければならぬのに全然  
結婚相手が決まらないという問題があり  
まだまだ安心できない日々が続いてる

とここまで皆の人生を見てきたがこれから物語をすすめていきたい  
と思います

今日は、ハヤテの命日（10月20日）。

ちなみにハヤテが死んだのは2008年で今は2013年という  
方向でお考えください。また、ハヤテの墓はナギ達兄弟の両親の墓  
の隣  
にあります。

ある日の白皇学院、ヒナギクは今日新しく来る転校生を待っていた。  
ヒナギクは転校生を待ちながらもふとこんなことを考えていた

「そういえば今日ってハヤテ君の命日だな・・・」

皆、あまり考えなくなったといってまだ5年

ハヤテのことをふと思い出すことがある。

確かに、悲しい過去だが泣くことはない。

なぜなら、もう過ぎたことは仕方ないと思ってるし

ワタルやハヤテも残った人が泣くことを望んでいないと皆分かって  
いるからだ

ふと思いつつも

「それにしても、転校生遅いんじゃないかしら」

そう思っすこし苛立っていると峻が入ってきて

「ヒナギク、転校生は急な用事があつて放課後の部活決めにしかこ  
ないことになった」

と言った。放課後に必ず入る部活を決めないといけないというのは

この小説の白皇だけの特別に造ったものである

「あ、あと前の学校で剣道やってたらしいから頼むよ」

「ええ、分かったわ」

と言うとヒナギクは教室へと向かった。

そして、時は流れあつという間に放課後、

ヒナギクははやく転校生が来て部活を決めることを願っていた

なぜかという今日はハヤテの命日早く帰って三千院家へ行かなければならなかったからだ

ちなみにヒナギクは剣道部顧問をやっています

と思っていると、

「すいません！遅れてしまいました」

と転校生が現れた。普通なら怒っているだろうがヒナギクは我が目を疑った。

なんと、そこにはハヤテがいたからだ

ハヤテが死んだ後周辺を探したがハヤテの死体は出てきませんでした

「ハヤテ君！？」

ヒナギクは思わず叫んだ。しかし、ハヤテそっくりの人は

「え？僕は堺正登って言いますし、あなたとは面識はありませんよ？  
ていうかハヤテって誰ですか？」

正登は聞いた。ヒナギクは

「な・なんでもないわ（そうよね、ハヤテ君は死んだんだし  
相手も違うつて言ってるし別人よね・・・」

ヒナギクはそういうと

「正登君だったかしら？私は桂ヒナギクよ。ここの顧問をやっているわ

あなたは剣道部に入りに来たのかしら？」

と言うと正登は

「はいそうですねよろしくお願いします」

正登はにっこり笑いながら言った。

「じゃあ、皆に自己紹介しましょ」

と言うとヒナギクは部員を集めた

「彼が今回入る転校生の堺正登君よ」

「どうも堺正登です前の学校では同じく剣道部でしたが

なぜかいろんな部活の人に頼まれて他の部活もやっていました。でも

剣道が1番好きです。あと趣味は料理、掃除、裁縫、などいろんな

ものが好きですね

勉強はあまり得意ではないんですがなぜかずっと学年で1番でしたね

まあ自己紹介はこれぐらいでいいですか？」

ヒナギクは思った

「（外見も同じなら、中身も同じなのねこの人本当にハヤテ君じゃないのかしら？）

じゃあ、早速正登君も入れて試合をやってみましよう」

ヒナギクはそういつて試合を始めた。

しかし、始めて30分もしないうちに試合は中止となった。

なぜか？それは正登が部員全員（軽く50人はいます）をあつという間に

倒してしまいもう対戦する人が残っていないという理由だった。

ヒナギクは帰ろうとしていた正登を呼びとめ

「ねえ、正登君今日用事ある？」

と聞いた。正登は

「今日は用事は特にないですけど・・・それがなにか？」

「いや、ちょっと来て欲しいところがあつただけどいいかしら」

「ええ、いいですよ」

正登はしばらく悩んでいたが答えた。ヒナギクは正登の答えを聞くと三千院家へと連れて行った。

「おお、大きい屋敷ですね。」

「じゃあ、行きましょ。」

ヒナギクは扉を開け、屋敷の中へと入っていった

その頃、ナギ達は

「遅いなヒナギクの奴・・・」

ナギはそういった。そこには

いつものメンバーが揃っていた。皆は笑っていた。

なにしろ皆それぞれ忙しいのでハヤテの命日などでしか顔を会わず機会がないからだ

だからこそナギからあの言葉が出たのだ。とそこへヒナギクが現れた。

「遅い！何をしていた？」

ナギは怒り混じりに言った。

「まあまあ、ナギ落ち着いて」

マリアがヒナギクをカバーした

「ごめんね、ナギ・・・それより皆にあって欲しい人がいるんだけど」

「誰だ？」

ナギが聞くと、ヒナギクは

「いいわよ正登君。入って」

正登はその言葉を聞いて、入ってきた。峻達は驚いたそれはそうだろうハヤテそっくりなのだから

「ハヤテ!？」

皆同時に叫んだ。しかし、正登はきょとんとしていたが

「誰ですか？ハヤテって僕は堺正登っていうんですが  
ていうか貴方達を見たこともないんですが・・・」

と言った。峻は

「ああ、すまん人違いだな」

「あの・・・桂さんもいつていたんですがハヤテって誰ですか？」

と聞いてきた正登に峻は全てを話した。

正登は話を聞いたあと、うつむきながら

「そうだったんですか・・・そんな話をさせたり思い出させたりしてすみません」

「いや、別にいいんだよもう5年もたってるし今日はそのハヤテの命日だから

君に話さなくても思い出してるしね。」

「はあ、そうですか」

「ほらほらそんな顔されるほうがこっちもつらいんだよ。元気をだして」

「ありがとうございます」

正登は笑顔で返事した。峻は

「（謙虚だし、優しい奴だな・・・ホントにハヤテじゃないのか？こいつ）」

と思った。そこへマリアが入ってきた

「明日は白皇は休みですが正登君は用事ありますか？」

「え？特にないですけど・・・」

「じゃ、明日行きませんか？ハヤテ君の墓に」

「いいんですか？僕部外者ですけど・・・」

「ウチは、ええと思うで」

「じゃ、お願いします」

「うむ、どうせなら今日は泊まっていくのだもう夜遅いしな」

「いや、そこまでしてもらうのは・・・ちょっと」

「いいんじゃない？少し欲張らないと幸せ逃げちゃうわよ正登君」その言葉についに正登も折れた。

「そこまでいつてくれるなら泊まります。じゃあ、親に電話させてください」

と言うと親に電話をし、正登は三千院家に泊まることとなった。

正登は名前を知らないため1人1人の名前を確認した。



「えーと、右から順に桂さん、鷺ノ宮さん、愛沢さん、三千院さん、峻さん・・・あれ？」

正登は不思議に思った。正登は指を指し、  
「なぜ、この人だけ苗字がないんですか？」

そういつた瞬間、部屋は凍りついた。正登はこれは聞いてはいけない話だったと感じ

「マリアさんとよばいいですね」

と言った。その言葉に凍りついていた部屋の空気が元に戻った

正登は安堵の表情をみせた。

ちょうどヒナギク達も泊まるとあつて三千院家はとてもにぎやかだった。

特に、正登は皆から引つ張りだこで疲れたのでトイレに行くことにした。

正登がトイレに行くために部屋を出て、トイレに行こうとしたが迷ってしまった。

そうやってトイレを探していると前方にトラがいるのが見えた。  
しかも目が合ってしまったため、いきなりこっちに走ってきた  
「うわ、やばこっち来た」

正登は急いで逃げたが、どんどん近づいてくるトラに正登はもうダメだと思った瞬間にトラは吹き飛んだ。

なにが起きたんだと思った正登は後ろを向くと、そこには峻がいた。  
「まったくなにやってんだお前は・・・正登大丈夫か？」

「いうかなにしてた」

正登はトイレに行こうとして迷ったことを正直に話した

「アハハハハ、なんだ迷ったのか」

その言葉に正登は顔を赤くしていて言った。

「仕方ないじゃないですか・・よく分からなかったんですから」

「じゃ、なぜ言わなかったんだ？」

峻が尋ねると

「えっと・・それは・・」

「はは、どうせ聞かなくてもいけると思っただろ？」

正登はコクリとうなずいた

「きにするな、ここは広いから迷いやすいんだ。」

ここに来た客も迷うことがあるなにもお前だけが迷ってるわけじゃないんだからな」

正登は

「（この人、なんて優しいんだろう、それにすごくかつこいいし、トラを一撃で

倒すなんて強すぎるし、なんか尊敬しちゃうな）」

と思っていた。正登がそんなことを考えていると峻が

「なあ、ぶちやつけ、お前堺家で生まれないんじゃないか？」

と聞いてきた。

「ええ、そうです。僕はもともと堺家にいたわけじゃありません」

峻はそれを聞くとやっぱりというような表情をした。正登は聞いた。

「でもなんで分かったんですか？」

「いやな、お前が電話してる時にお前の話し方が親と話すものには見えなかったんだよな」

そういった後トイレに着き、トイレをしたあと出てきたときに考えていた

「（あれだけで分かるなんてすごいな・・・）」

と思った。峻が部屋に戻る途中、聞いた

「で、お前どうして堺家にいるんだ？」

正登は峻に話した。その内容は、自分は生まれた日も自分がなんていう名前かも分からないこと、浜辺に打ち上げられていたのを見つけて拾ってくれたことなどだった。

峻は、

「なんか、嫌な思い出を思い出させたなすまん」

「いや、逆に言っただけなんかつきりましたよ。ありがとうございました」

と言っているうちに部屋に着いた。そのあとは何事もなく時間が過ぎ、

寝る時間となった。明日はなにが起こるのか楽しみな顔をして正登も眠りについた

## 10話（後書き）

話がまとまっていないですこの話は  
よくわからないかもしれませんすみません  
さてここから第2章目に入っていきます  
気長にお待ちください

## 11話（前書き）

今回からオリキャラを紹介していこうと思います。

三千院 竣

三千院家長男。次期当主と言われたがナギに譲り、白皇学院の理事長をやっている。また、優しくも厳しいので、周りの人から多くの信頼を持っている。

## 11話

次の日の朝、正登は三千院家で目を覚ました。

「あゝ、よく寝た。ていうかやつぱでかいなあ」

正登にすればこんなところもう一生来れないところであろう。

しかし、起きてすぐ正登は何かに気づいた。

「どうしよう・・・着替えないじゃん」

そう、屋敷に泊まったのはいいが屋敷に着いてから泊まることになったため

着替えなどあるはずがないのだ。とりあえず正登は

部屋を出ることにした。どこへ行くか迷っていると声がした。

その部屋のドアを叩き、どうぞと言う声が聞こえたので、

部屋に入った。そこにはほぼ全員（ナギ、伊澄以外）揃っていた。

「お、正登おはよう」

「おはようございます」

そうあいさつした正登は聞いた。

「あれ？三千院さんと鷺ノ宮さんは？」

「ああ、あの2人はまだ寝てますよ」

とマリアが言った。今の時間は9時である。正登は

「（まだ、寝てるのか、ていうか寝すぎじゃないですか？）」

と心の中で叫んだ。ちなみに正登が起きたのは8時だが

着替えないやらで困っていたためこの時間帯になっしまっただけだ。

すると、峻は聞いた

「なんで、お前こんな時間帯に来たんだ？」

「いや、僕着替えないから困ってたんですけど・・・」

すると、峻が

「あ！そっかお前着替え持ってきてないもんな（笑）」

そう言いながら笑っていた。その言葉に周りの人達も笑っていたが「笑い事じゃないですよ、ひどいですよ笑わないでください!!」

「あはは、いやーごめんごめん・・・着替えなら俺の使えよ」

「え? いいんですかそんなこと」

「遠慮するな正登ちよつと来い」

と言うと峻は正登を自分の部屋へと連れて行った。

「さあ、どれでもいい選びなさい」

「え? そんなこと言われてもこれは・・・」

正登が迷うのも無理はなかった。

そこには何千着もの服があつたからだ。なにを選んでいいか分からない正登は

とりあえず峻に質問してみることにした。

「峻さんってこの服全部着たことあるんですか?」

「ん、ないな基本的に俺は向こうの服を着るからな」

正登は峻が指差したところをみた瞬間に啞然とした。

そこにはこれまた何百着という服があつたからだ。

「じゃあ、向こうのは全部着てるんですね」

「ん、よくわからんがきてないのもあるんじゃないのか」

「あはは・・・そ・・・そうなんですか」(ホントに

この人達日本人なのか?)

そう思っていたがいつまでも悩んでいるのも時間の無駄なので

峻にお願いをしてみることにした。

「あの・・・服が多すぎて迷うんで、僕でも似合いそうな

服選んでくれませんか?」

「ん? いいぞ・・・でも俺に選ばせていいのか?

後悔してもしらんぞ?」

「いいですよ。これは峻さんの服なんですから」

しかし、峻は思った。

「(いくらこの服が俺のでもきちんを選んではやらないとな・・・)」

そんなことを考えながら、服を選んでみると1着の服が目に入った。それは以前これと同じような出来事があったときハヤテに貸した服であった。峻はこれがいいなと思ったかどうかはわからないが

「これなんかどうだ？俺的にはいいと思うんだがな」

「確かにカツコイイですねこれ、じゃこれにします」

「そうか、じゃ俺は部屋の外で待つてるから着替えたら呼んでくれ」  
そういうと峻は部屋の外に出た。峻はふうと息をはき

「（そういえば、ハヤテのときと同じこと言ってたな、なんでだろう？）

正登もハヤテと同じ答え方だったな正登はハヤテじゃないのか？」  
峻には思い当たることがたくさんあった。

まず、外見が同じなこと、しかしこれは対して問題ではない次に言語、特に困っているやからかわれているときの口調は

ハヤテそっくりだ。趣味もハヤテとまったくもって同じだった。

そんなことを考えていると正登の声がした。どうやら着替えが済んだらしい。

峻が部屋に入ると正登が

「これどうですか？僕はとてもいいと思うんですけど」

「ああ、とっても似合ってるじゃないか！」

「ありがとうございます。では行きますか」

「そうだな」

そんな会話をしながら峻と正登は部屋に戻った。時刻は10時を過ぎていた。

部屋に入るなり、峻は急に機嫌が悪くなった。

「まったく・・・あいつあんなに夜更かしするから」

ちなみに、伊澄はもう起きてきています。

隣でマリアが

「まあまあ、落ち着いて峻。それにしてもその服久しぶりに見ますね」



「へ？この服がどうしかしたんですか？」

「その服は5年前にハヤテが着てたもんや」

「あ、そうなんですか」

「しかし、その服似合ってますね正登様」

「本当ね、似合ってるわよ正登君」

「ありがとうございます」

「確かに似合ってるな」

その声に、後ろを向くとナギがいた。

「あ、三千院さんおはようございます」

「なんだやつと起きたのか？」

「ナギ遅いわよ」

「もつと早く起きないとダメよナギ」

「伊澄さんも人のこと言えんやろ」

「ナギ、人待たせちゃダメですよ」

「咲夜さん！！」

「なんや、和哉さんやん。なんで来たんや」

「なんでじゃないよ。勝手に置いて行っておいてそれはひどいんじゃない  
やない

一緒に連れて行ってくれるって言ったのにさ」

「ああ、すまん、すっかり忘れてたわ」

「まあいいですよ」

それぞれ話していると正登が

「あの、そろそろ行きませんか？」

「あの、咲夜さん？そちらの方は？」

「あ、こいつは・・・」

「堺正登です宜しく願いしますあなたは？」

「俺は森和哉だ宜しく」

そして、峻達はハヤテの墓がある伊豆へと向かった。

しかし、正登は行くときにも驚きしっぱなしだった。

和哉は最初、咲夜と一緒に時は驚いていたがもう慣れてしまった

らしい。

まず、敷地内に飛行場や湖、遊園地などあることなど普通はないし、普通に200人は乗れるかという飛行機を持っていることにさらに啞然としていた。

「いや、すごいですねえ」

「え？これよりもっと大きいのあるぞ」

「は？いやいやこれ以上大きいって言ったらジャンボジェットですよ」

そういつた瞬間にジャンボジェットが5台あるのが見えた。正登は啞然としていたが

「あははー、それより早く行きましょうか」

「ああ、そうだな」

それから、約1時間後峻達は伊豆に着いていた。

「さて、行くか」

そういつて峻についていくとそこにあつたのはどうみても同じ屋敷があつた。

「あの・・・これ、かわつてないんじゃない？」

「いや！違うぞ、ほら太平洋の絶景が広がっているんだ」

「本当ですね、ていうかそれだけなんじゃ・・・」

「う・・・まあそうなんだけど」

「じゃ、墓参りともいくか」

峻達はハヤテの墓がある場所へと向かった。

まあ、屋敷の裏にあるからすぐ着くのだが・・・

ハヤテのお墓参りも終わり峻が

「じゃ、夕食まで自由時間とする」

「え？帰らないんですか？」

「ああ、これが本当の目的なんだ」

「へー、そんなんですかでも僕は・・・」

「いいだろ、明日まで休みなんだから、俺からお前の親に電話しといてやるから」

「そこまでいうなら、遠慮なく楽しませていただきます」

「それでいいんだ。あ、それとお前は俺と行動してもらおう」

「なぜですか？」

「お前はハヤテに似ている・・・ハヤテはよく女装させられてたんだお前もやられるかもしれないからさ」

「なるほど」分かりました。では一緒に一緒にさせていただきます」

「念のため、正登を女装させようとしたらお前らただじゃおかないからな」

一応、峻はナギ達にも忠告した。

ちなみに、（峻・正登）、（ヒナギク・マリア）、（ナギ・伊澄）、

（咲夜・和哉）

で行動します。

それぞれのメンバーごとに別々の温泉へと向かった。

ではそれぞれの過ごし方を見ていこう。

まず、ナギ、伊澄ペアは伊澄が持っている温泉に来ていた。

温泉に入りながら、ナギが漫画の話をしていた。

よくのぼせないなと聞こえる声はスルーしていこう。

さて次の咲夜と和哉ペアは咲夜が持っている温泉へと来ていた。

「いや、まさか咲夜さんが温泉持っているなんて思いませんでしたよ。」

さて、次はどこへいきますか？」

「せやな、いろんな温泉回ってみようないか」

そんな話をしながら、温泉巡りを楽しんでいた。

次に、ヒナギクとマリアペアはとりあえず温泉を巡っていた。

温泉の中ではヒナギクとマリアが話していた。

まあ、主にヒナギクの相談や悩み事をマリアが一刀両断できっていく

だけなのだが・・・。

最後に峻と正登ペアはというと伊豆の奥にある

温泉へと来ていた。

「いやゝ、なんか秘湯っぽいところですねえ」

「ああ、そうだな。しかし途中のあの人なんだったんだ？」

「ええ、確かにあの人行くのに4000円ってぼったくりですよね」

「まあ、あれぐらい気にしないけどな」

「それにしても峻さんって白皇学院の理事長さんなんですね。

ビックリしましたよ。」

「え？あ、そういえば言ってなかったなすまん」

と楽しく世間話をしていました。

そしてあつという間に夕食の時間

峻は正登の両親に電話するために席を外していましたが、客がきたので客の対応をしていました。

「いやゝ、峻さん遅いですね」

「まあ、それはいいとして正登・・・」

と言うとナギは笑っていました。正登は嫌な予感がしました。しかし、嫌な予感

は現実となりました。ナギの次の言葉によって

「お前、この服着てみてくれないか？」

とナギは女の子の服を持っていました。そのナギの言葉に

「おお、ええな」

「見てみたいわね」

「私も見てみたいです」

「あ、俺も見てみたいな」

「正登君にはフリフリのドレスが似合うと思いますよ（笑）」

「うむ、全員一致だな」

「そんなあ無理ですよ（と油断させて・・・）今だ！！」

正登は隙をついて逃げ出しました。後ろからナギ達が追ってきますがなかなか追いつけません。

「待て」

「待てっていわれて待つって人なんかいませんよー」

「正登君、あきらめてこの服を着てください！！」

「人間、あきらめたら終わりですよー」

しかし、廊下はいきどまりになった。正登どうなる？

女装させられてしまうのか？

ナギ達が正登に近づいていった瞬間に後ろから声がした。

「お前らなにやってんだ？」

そこには峻が立っていた。峻は正登の方へと近づき、

「なるほど、正登を女装させようとしてたんだな？」

「いやしてないよなにも」

その言葉はどこか震えていた

「本当か？正登」

「峻さんの話がだいたいあってます。ていうか全部あってます」

その話を聞くと峻は後ろを向いた。あきらかに

峻の後ろから黒いオーラが出ていた。

ナギ達はびくびくしていた

「あれほど、女装させるなど言っておいたのに・・・

早く食堂に戻ってる」

「はい」

ナギ達は急いで食堂へと走っていった。

「まったく、あいつらはもう・・・」

「まあいいですから、戻りましょう。峻さん」

「そうだな」

と言うと峻と正登は食堂へと向かった。食堂へと行くと

その後は何事もなく時間が過ぎていた。

食事が終わると、皆おもしろい好きなことをやっていた。

漫画をよんだり、ゲームをしたりしていたが時刻は11時を過ぎていた。

「さて、みんなもう寝よう。今日の朝みたいになったら困るからな」と言う峻はナギと伊澄の方を見た。

「な・・・なんだよなんでこっちみるんだよ兄さん」

「まあ、別にいいけどな・・・」

とナギ達は楽しく話していました。

さて、場面はかわって屋敷の外、3人組の男達がいました。

「くく、ここが三千院家の別荘か・・・」

「結構広いですね」

「それだけやりがいがあるってもんよ」

「さていくぞ」

「はいボス」

この3人組はなにをするつもりなのか？それは後ほど分かります。

さてここはナギと伊澄の部屋。

部屋は（ナギ・伊澄）、（咲夜・和哉）、（ヒナギク・峻）が2人で

正登とマリアは1人ずつです。またマリアは2人で寝てもかまわないと言ったが、

正登が女の人の寝るのはよく寝れないからいいですと断ったため別々に寝ています。

話がずれてしまったので戻そう。

ナギと伊澄はあれだけ峻に早く寝ろと言われたのに夜更かしをしていた。

しかし、温泉に長く浸かっていたからかいつもよりはやく寝た。

深夜2時ごろナギはトイレをするために起き、トイレへと向かった。しかし、トイレから帰ってくるときに事件が起こった。

トイレから戻ってきていた途中、何者かに口を布のようなもので押さえられた。

ナギは必死にもがいたが相手が男であることに加え、布の中にクロロホルムが入っていたらしく急にナギはガクンと力が抜けた。

男は

「ククク、意外と簡単だったな」

と言うとナギを抱え、屋敷から去っていった。

## 11話（後書き）

皆さんどうでした？なんか正登と峻がでてくるのが大部分をしめているのですが気にしないでください。



## 12話（前書き）

堺正登……

砂浜で倒れているところを偶然遊びに来ていた堺家に助けられ、引き取られた。

年齢、生年月日、誕生日、名前はまったく分からず正登と名づけられる。

成績優秀、スポーツ万能、おまけに学校の生徒はおろか先生までも

正登を信頼していた（生徒会長も務めていた）。

現白皇学院（前潮見高校）で剣道部所属。いつも頼られる存在だったため、

自分をリードしてくれる峻達を尊敬している。

また、峻が正登の拾われたところがハヤテが自殺したところから近いため、

ハヤテだが記憶を失っているのではと疑っている。

ちなみに家族構成は義父、義母、姉の4人家族。

## 12話

次に日の朝、三千院家の別荘では大騒ぎになっていた。

それは当主のナギがいなくなっていたのだから

当然だろう。特にマリアのあわてっぷりは尋常じゃなかった。

そのあわてっぷりに峻達も啞然としていた。

いつもは冷静なマリアがおどしているのだ。

ろくに紅茶もいれられないのだ。

しかし逆に、それほど心配してくれる人がいてくれる

ナギがうらやましいと正登は思っていた。

峻達がナギを探し始めて約30分後、

SP達があわててやってきて

「先ほど、このような手紙が届いてました」

その言葉にすぐ反応したのは峻だった。

すぐSPから手紙を受け取りしばらく手紙を読んでいたが、

「皆見る！」

と言うと峻はその手紙を皆に見せました。

「三千院家に皆さんへ

三千院ナギは我々が預かっている・・・

返して欲しくば身代金10億持つて

港近くの 会社の工場に來い

さもなければ人質を殺す。」

それは、身代金を要求する脅迫状だった。

それを見たマリアはすぐにSPに10億を持ってこさせた。

その光景を見た正登は、

「それ、10億ですよね？」

「ええ、そうですよ」

「いやいや、そうですよじゃないですよあげちゃダメですって」

「でもこうしないとナギが助からないし、10億ぐらいで助かるんですしたら

別にこれぐらい払ってもいいんですよ」

「いやダメですから（ていうか金銭感覚なさすぎでしょ）」

「そうだマリア。あげる必要はない」

「でもどうするんですか？」

「あげるフリをして相手を倒そう」

皆は峻の意見に賛成した。問題は誰が相手を倒すかだった。すると、正登が

「倒す役目は僕に任せてください」

「えっ？いいのか！？正登」

「はい！人を傷つけるのは絶対に許せません！！僕はそういう人が1番嫌いなんです」

「よしいいだろう・・ただし無茶だけはするな」

「もちろんです、無茶だけはしません。三千院さんを助けるのが本当の目的なんですから」

兎に角、峻達は犯人とナギがいる場所へと向かった。

「おい、約束通り来たぞ」

「ふん、やっと来たか。こっちに金を見せな」

「その前にナギを返してもらおう」

「それはできないな、まず金だ金を見せろ」

「じゃ、ナギを見せろ」

「いいだろう、こっち来な」

そういつて向こうへと歩いて行く犯人についていくと・・  
ナギが椅子に縛られて座っているのが見えた。

その周りには、他の２人の犯人がいた。

「さあ、人質は見せたぞ早く金を渡してもらおうか」

「分かった」

そう答えると峻は金の入ったバックを渡そうとした。

しかし、正登のそれを止められた。

「正登！？」

「貴様、何してる」

「お前らみたいな奴に渡すかねなんてないよ」

「なんだとお、調子に乗るなよ」

そういうと犯人達は日本刀を出した。それを見た正登は、

「来い！ダークデスナイト」

すると、頭上から真剣が現れた。それを手にした正登は

構えるといきなり飛び出した。

しかし、次の瞬間皆は目を疑った。

正登は、そのまま歩いていつてナギの近くにいったからだ。

「大丈夫ですか？三千院さん」

「ん？あ・あ大丈夫だぞ」

「そうですかそれはよかったです」

そんな話をしていると犯人達は

「お前、ナメてんのか」

と言うと日本刀をかざして正登に襲い掛かった。

「甘いな」

正登がその言葉を言った瞬間、襲い掛かった犯人達はなぜか吹っ飛びました。

「真剣奥義やはず斬り！！！」

そう言つて正登が真剣をしまつと犯人達は倒れた。

「正登君？あの人達大丈夫なんですか？」

「まあ、悪者だからいいでしょ」

「いやいやダメだろ」

ナギが突っ込んだ。

「いいんですよ。悪い事した罰ですよ」

と正登は笑顔で言った。

「いやいや、なにさわやかな顔で堂々と言ってるんだ」

「いいんじゃない・・・」

と正登が言いかけた瞬間、峻が言った。

「まあ、生きてるんだしいいとしてまさか

真剣奥義やはず斬りを使う奴が俺以外にいたとはな・・・」

「えっ？峻さんも使えるんですか？」

「ああ、使える。まっお前ほど威力はないと思うけどな」

「ていうかそんな会話してないで私を助けてくれないか？」

とナギが割り込んできた。

その言葉に正登が

「あ、すみません。今助けますよ」

と言うと正登はナギを助けた。

「ふう、やっと助かった」

「大丈夫？ナギ」

「ああ、大丈夫だぞ」

「心配したのよ」

「大丈夫だつて」

「まったくそんなこといつてるがお前は昔と違うんだ、  
今は当主なんだから・・・死なれては困るんだ」

「ああ、分かったよ兄さん」

それを見ていた正登が、

「三千院さんって峻さんに弱いんですねえ」

「いや違うぞ！！ただ兄弟の関係だからということだぞ」

「え！？でもそれって弱いつて事じゃないんですか？」

「いや・・・それはその・・・」

「いいにくいんですか？」

「兄さんはとつても頼りになるし・・・」

「ふくんそうなんですか」

「ええ、ナギはそういうこともあつて峻を副社長に任命してるんですよ」

「はは、なんだかすごいですねえ」

「ていうか帰りましょうか」

「そうやな和哉さん」

「そついえばお腹減りましたね」

「ナギを助けるためにずつと朝から探していたからな」

そついうとS Pに犯人達を任せて三千院家の別荘に戻ってきました。ちなみに、現在の時刻は11時30分です。

「さて朝ごはんでも作るか」

「では私が作ってきますよ」

「いえ、マリアさんは疲れているでしょうから、僕が作りますよ」

「え？いいですよ正登君は客なんですし・・・」

「いいですよ。マリアさんあんなに心配して疲れたでしょう？」

あまり疲れている状態で仕事をするもんでありませんよ」

「いや、でもそれは・・・」

「いいじゃないかマリア、それに正登の作った料理を

俺は食つてみたいと思うぞ」

「私もだ。マリア無理はいかんぞ」

「私も食べてみたいです」

「正登の作った料理うちも食べてみたいわ」

「俺も食べてみたいな。ていうか正登君はそういう女の子っぽい趣味があつたんだね」

「いや、それはべ・・・別にいいじゃないですか」

「私も食べてみたいわ、マリアさんたまには息抜き

してみるのもいいんじゃないですか？皆がせつかく言ってくれてるんですし」

「では皆さんがそんなにいうなら、正登君頼みますよ？」

「はい！任せてください」

と言うと正登は厨房へ向かった。

正登は厨房へ行くと目を丸くして驚いていた。

そこには大量の食材があつたからだ。しかも全て高級食材となれば驚かないわけがなかった。

しかし、いつまでもとまっているわけにはいかないのでとりあえず料理を始めた。それから15分後

「よし！できた。うんまあまかな？」

と言うと正登は料理を運んでいった。運んで食堂まで持っていくとナギが

「おお！うまそうだな」

「ありがとうございます！」

どんなものだったかというと・・・

シーフードサラダ、米沢牛のソテー、コンスープです。

これが昼食のメニューか？という声はほっというナギ達は食べ始めました。

ちなみに峻はトイレに行っていてまだ戻ってきていません

「ん！これはうまいな自分」

「ええ、これはおいしいですね」

「正登君って料理うまいんだな」

「確かにこれはうまいわね」

「うむ、レストランのメニューにでてきても不思議ではないな」

「これはうまいですね、正登君感動しましたよ」

「皆さんありがとうございます」

「へえ、そんなにうまいのか？」

と峻が言った。ナギ達は心配になった。なぜなら峻は自分がとても料理がうまいため、料理にはこだわりがあつたからだ。

峻は1口食べた。正登はどんなことを言うか期待していた。

「うん、これはうまいなナギの言うとおりレストランにでてきても不思議じゃないな」

「峻さんありがとうございます」

「でも、兄さんがあんなにほめるなんて見たことないよな？マリア」

「たしかに峻はこの前は世界でも有名なレストランにいつてもおいしいっていわないくらいきびしいですからね」

「これは本当においしいな。ま、俺には及ばんけどな」

「え？峻さんも料理するんですか？」

「おお、するぞ」

「峻の料理は私達がいままで生きてきた中で一番おいしいんですよ」

「そうなんですか？」

「うむ、とてもうまいぞ」

「いいな、料理うまくて・・・」

「そういえば咲夜さんも料理うまいよなあ」

「え？そないなことないで和哉さんなに言うてんねん！！」

「そう言った顔は少し赤くなっていた。」

「いや・・・ごめん・・・」

「そついや、和哉さんも料理うまいやないか」

赤くなつた顔で咲夜はそう言った。

「いや・・・あれは料理じゃないでしょ」

和哉も顔が赤くなっていた。正登が

「お2人ともなに顔を赤くしてるんですか？」

するとナギが正登に小声で言おうとしたのか

近づいたがあきらかに皆に聞こえる声で

「咲と和哉はいちやいちゃしてるんだ。正登、

お前勝手に入つていったらダメだぞ」

その言葉にさらに顔が赤くなつたが正登の言葉で2人は限界まで赤くなつた。



「へえ、そんなんですか。でもそうやって赤くしていると僕はいじつてみたくなるんですよ」

そう言っていると目を輝かせて咲夜と和哉の方を見た。

「（あかん、あいつあきらかにSの目にはいつとる

このままじゃなにされるかわからんで。ここはなにか別の話題振らんとかなり・・・いや絶対ヤバイで）

そ・・・そや伊澄さんも料理上手やったやろ？」

「え？まあそうだけど・・・」

「へー、鷺ノ宮さんも料理うまいんですか」

「うむ！伊澄の料理もうまいぞ」

「そういうナギもうまいじゃない」

「えっ？三千院さんもうまいんですか？

じゃあ全員うまいってことじゃないですか」

「確かに、いわれてみればそうだな」

そんな会話をしているうちに皆は食べ終わっていた。

「あ、皆さん全部食べましたね。」

と言つて、皿を片付けた。

その後は何事もなく、時間が過ぎ

峻達は東京へと帰ってきた。

「じゃうちらはこれでひとまず

帰るわ。また明日な」

「ああ、いつでもきてくれ」

今、向こうの高校は夏休みという設定です。

「じゃ、SP！正登を家へ送ってやれ」

「今日はいろいろありがとう」

「いえいえ、こちらこそとてもいい体験ができましたではまた会えたらあいましょう」

と言うと正登を乗せ、車は去っていった。

ちなみに、伊澄はナギの家に泊まることになっている峻とヒナギクは屋敷内の別宅に住んでいる。

まあ、一緒にご飯を食べるし、ナギ達の屋敷にはヒナギクと峻それぞれの部屋があるため別宅と言っても部屋みたいなものらしい。

さて、それは置いて一方の正登はと言うと

「では正登様お休みなさいませ」

「あ、はいありがとうございます」

（ふう、SPの人達まえから思ってたけどこわいよなあ）

注：たぶんこんな考え方は正登だけです。違うかもしれませんが・

そんなこんなで1日が過ぎた。

いろいろあった今日1日峻達にはいつものことだったかもしれないが正登にとってはとても貴重な体験だった・・・はず

この1日をさかいに正登の新たな人生が始まるうとしていた。  
それは次回に続く。

## 12話（後書き）

どうでした？なんか話がずれているような・・・

まあ、我慢して読んでください。

どうか評価してくださいお願いします！

全然ダメだとかでいいんで指摘された

部分は必ず直していきたいのでお願いします！！

### 13話（前書き）

森和哉・・・

アメリカ有名大学に通っており、咲夜と結婚  
をしている。成績はまあまあでスポーツもかな  
るが大学の中で人気のある咲夜と結婚

り出来

したためクラスメートにからかわれることが  
多くなったが本人はそっちのほうが好きらしい  
森家の家族構成は父、母、弟、妹2人の六人家族  
である

## 13話

「なあ、正登お前執事やらないか？」

なんでしょうこれいきなり会話から出てきたのでよく分からない方のためにどうやってこの場面になったかを振り返ってみたいと思います。

充実した1日の翌日、正登はなぜかこの寒い中外にいた。

「ん？もう朝か・・それにしても眠いし寒いなあ」

なぜ正登が外で目覚めたかと言うとある理由があった。

これは昨日の家に送ってもらったときにさかのぼる。

家の中に入ると、姉が目の前に立っていた。

「なにやってたの？こんな時間まで」

「何でもいいじゃん姉ちゃんに関係ないよ」

この女性は堺詩織。つまり正登の姉だ。

もともと堺家で生まれ、現在大学3年生だ。

正登が堺家に来ることに1番賛成し、喜んでいた。

いつも正登のことを気にしてくれている優しい人なのだが

正登にとってはかなーりおせっかいでうつとしらしい。

そんな姉だから今回も正登を心配してのことだったが

この優しさが事件に発展するとは思わなかった。

「（あゝいつもいつもうつとしいな）」

そんな事を思いながら正登は通り過ぎようとした。

いつもなら、仕方ないわねと言ってそのまますんなり終わるのだが今回は違った。

「待ちなさい！正登！それはないでしょこんなに心配してたのに・・

「なぜこんなに心配しているか」と言うと正登が家に何日も帰ってこなかったからだ。まあ正登と峻がそれぞれ家に電話をしていることから

親がこの姉に伝えていないということが分かるだろう。

ちなみに両親は外出中で今はいない

「（まいったな、義母さん達伝えてくれてないのかよ・・・

こうなったら姉ちゃん止められないんだよな・・・さてどうするかな）

義母さんに電話は一応したんだけどさ・・・」

「うそを言わない！お母さんは電話なんかもらってないって言うてたわよ」

「（げっ！？あの親ど忘れしてやがんのかよ）」

「どういうことか説明しなさいよ」

正登は全て昨日までの自分の出来事を話した。が信じてもらえるわけがなかった。

「そんなのうそでしょ。そんなバカな話があるわけじゃない」

確かに知らない他人にいくら似ているという理由で家に泊まったり、

その人の墓にいけるなんてバカげた話だった。

しばらく言葉の言い合いをしていた2人だが

ついに、詩織がキレた。

「うるさいわねもういいわ」

と言った瞬間正登は殴られていた。

「痛てっ！なにすんだよ」

「あんたなんかどっかいけばいいのよ！！」

と言うと詩織は自分の部屋へと戻っていった。

最初は啞然としていた正登だが

「ああ、いいよどこにでもいつてやるよ」

そういうと必要な服などをまとめ家から出て行った。

そして正登は近くの公園（負け犬公園）のベンチまで行くと

そこに座ってそのまま寝てしまった。

このあと冒頭の部分が入るのだ。

目覚めた正登はさっさと学校へ行く準備をして学校へと向かった。まだ時間は早かったが学院内なら暖房もついているのでそのまま外にいるよりはマシだった。

それから1時間半ぐらいたつと8時30分となり授業が始まった。白皇の授業は普通の高校と違い1つの授業が2時間の5時間授業で大変だったが

勤勉で成績優秀の正登には関係なかった。

注：これもこの小説独自の校則です。通常こんなに長くない・・・はずです。

それより、正登は前の学校で生徒会長をやっていたこともあり大変人気があった。特に女子からは絶大の人气で授業が終わるとかならず周りを囲まれるのであつては正登も苦痛だった。

おまけに正登の周りに女子が集まることによって男子達はかなり正登を

キツイ目で見ていた。しかし、正登が剣道部で初日から部員をコテンパンに

したことは皆知っているためせいぜい裏で陰口を言うぐらいだったがそれでもこの悪循環はかなーりきつかった。

しかし、授業が終わって学校が終わるときはさすがに女子も周りに来なかったのだ

HRが終わると、担任でもあり部活の顧問でもあるヒナギクの所へ行き、

今日は部活があるかどうか聞いてみた。

「桂先生、今日は部活あるんですか？」

するとヒナギクは困ったような顔をした。

正登はなんだろうと思ったがふと思い出した。

自分が部員を倒して怪我をしたから部活などできる状態ではないこ

とを・・・

「あ、そういえば部活はできませんねあれは僕のせいです。すみません桂先生」

「いいのよ、それより私のことは学校でも桂さんと呼んでいいわよ」

「はい分かりました」

「それより、今日ヒマ？」

「なんでですか？桂さん」

その言葉にそこにいたクラス全員が固まった。

そりゃそうだろう校長もヒナギクのことを先生と呼ぶのについて何日か前に入ってきた生徒が

桂さんと呼んだのだから・・・

特に、男子の反応はヤバかった。ヒナギクは生徒からとても人気があり

ファンクラブまで結成されているなどかなり信頼を得ていた。

正登は周りから聞こえてきた声を聞き取った。

「おい、あいつ今桂さんて」

「ああ、言ってたあいつ何様のつもりだよ」

その言葉に正登の勘が言っていた。正登は小さい声でヒナギクに話しかけた。

「（まずい、これは非常にまずい空気だ。なんとかここから抜け出さないと・・・）」

とりあえずその話は他のところでやりませんか？」

「あ、別にいいわよ。じゃ一緒に帰りましょ」

「それと・・・正門までは別々に行きましようなにやらヤバい空気が今流れているんで」

「分かったわ、またあとでね」

それから約10分後ヒナギクと正登は正門の前にいた。

「さて帰りますか」

「正登君！今日ヒマ？」

「え？いや・・・ヒマっていうか・・・その」



「どうしたの!？」

「それが・・・昨日家で姉ちゃんとケンカして家出てきたのでヒマって言うか帰るところがないというですね状況に・・・」

「じゃ、ヒマってことね?ていうか大変ね」

「ええ、そうです。でもどうしたんですか？」

「ナギがあなたのこと呼んでるのよ」

「え?三千院さんが?では早速行きましょうか」

「ていうかもう目の前なんだけど」

「あつ、本当ですね」

ヒナギクと正登は屋敷内に入ってしまった。屋敷の中を歩いているとマリアが

待つていたように立っていた。

「あ、マリアさん。こんにちは」

「こんにちは正登君ではこちらへ来てください」

「正登君こつちよ」

マリアとヒナギクに言われるまま正登はついていくと

ナギの部屋へと通された。

「おお、正登よくきたな」

「ええ。で、三千院さん何か僕に用事ですか？」

「お前、アルバイトっていうか仕事してみないか？」

「えっ?仕事ですか?・・・そうですね。なにかしたいとは思っていたんですが・・・なにかいい仕事あるんですか？」

正登がナギに聞いた。

「うむ!1つ紹介したい仕事があるんだが・・・」

「なんですか？」

「私の執事をしてもらいたい」

「は?それは三千院さんを守るとかそういう系ですか？」

「うん、まさしくそうだ」

「その仕事をするってことは俺の執事もやるってことだよいいの?」

「あ、峻さん。うゝん確かにそうですね」

ここで峻達は正登が口にした言葉に戸惑った。（ヒナギク以外）

「その仕事って住み込みで出来るんですか？」

「え？あ、うんできるけど」

その言葉に安心したのか

「（このまま外で生活しててもなあ、ならこの家に住みながら仕事をするか）ではその仕事させていただきます」

「ほ・・・本当か！？」

「ええ、本当ですよ」

「では早速正登の家に電話をしないと」

しかし、その言葉に正登は急に不機嫌な顔にかわった。

「ん？正登どうした？」

しかし、正登からの反応がない。そこでヒナギクが気を利かせて正登の代わりにナギ達に昨日の正登の家での事件を話した。

「それはまた大変な事件に巻き込まれたな正登」

「ええ、ホント大変でしたよ」

「ま、これでとにかく執事決定だな！」

「はい！！これからよろしくお願いします！ナギお嬢様、峻様」

「おお、頼むぞ」

「ま、頼むよ。それと前理事長（葛葉エリカ）が久しぶりに帰ってくるって言うから

お前の学年主任と学院の総責任者となったからよろしくな」

「はい！分かりました」

その頃、正登の姉：詩織は両親から電話していたことを知り、家を出て行った正登を探していた。

「（正登に悪いこと言っちゃったわね。私が人の話を聞いて行動していればこんなことにはならなかったはずなのに・・・」

ごめんね正登待ってて今見つけ出すから）」

そんなことを考えていると自然と目から涙がポタポタ流れていた。  
「（ダメよこんなことで泣いてたら絶対ダメなんだからはやく

正登を見つけないくちや」

しかし、三千院家の屋敷内にいた正登を見つけられるわけもなく結局見つけ出すことが出来ず、家に帰ってきた。

「詩織・・・気にしないで」

「うう・・・私が理由も聞かないで追い出したから・・・」

「詩織気にしないで。正登のことだからちゃんと立派に生活しているわ」

だからあなたが正登のことの信じてなきやダメよ」

「うん・・・わかったわ」

さてそんなこんなで正登の激動？の1日がおわった。

### 13話（後書き）

なーんか今回は納得いかないっていうか・・・  
終わり何処が微妙になってしまったので読みづらいかもしれません。  
次回は三千院家の日々みたいなものを書く予定です

## 14話（前書き）

堺詩織・・・

堺家の長女。とても責任感が強くて心優しい人だが正登に言わせればかなーりのおせっかいらしい・・・。家族構成は祖父、父、母、妹、兄、弟、正登の7人家族である。

## 14話

激動？の1日だった10月24日。その翌日

正登は新しく自分の家となった三千院家の屋敷で目覚めた。起きるなり正登は思った

「はあ、やっぱりここがかいよなこの部屋だけで僕の部屋の何倍あるんだろう？」

ていうかもう一生これないと思っていたのにまさか住むことになるとはな

今の僕って幸せだなあお嬢様と峻様に感謝しないといけないなあ……よし！僕のためにこんなことをしてくれた2人に喜んでもらうために頑張らないとな」

そんなことを1人でぶつぶつ言っている

「朝からご立派なことをいつていますね正登君は」

「うわ！？ま・マリアさんいつからそこに？」

「いつからって言うか・・この隣の部屋は私の部屋ですからね。起こそうと思ってきたらご立派な宣言されていらっしやっただんでしゃっべているとき声はかけないでいたんですよ。

これからしばらくっていうかナギのお供をしてもらいます。ですので学校にはあまりいけないかもしれませんが頑張ってください。

ではまずナギを起こしてきてください。今日は大事な仕事があるので無理やりでもかまいませんので起こしてきてくださいね」

「はい、分かりました」

正登は、ナギの部屋の前まで来ていた。

”しかし、この屋敷ホント広いなあ”と思いつつも、

「お嬢様、朝ですよ。起きてください」

しかし、反応がなかったので部屋に入ることにした。

「お嬢様、おはようござ……」

正登は、入った瞬間に目に映ったのはナギと猫という名のトラと一緒に寝ているとこだった。

「あれって、峻様言ってた猫だよな」

そんなことをぶつぶつ言っているとなギが起きた。

「ん……おお正登か……おはよう……ていうかなんでそんなに固まってるんだ？」

「いえ、後ろ……」

「ん？……あ、タマまた一緒に寝てたのか」

「（ええっ！？これって日常茶飯事なのかよ？）」

正登は心の中で突っ込んだ。すると、

「ククク、それでは立派な執事にはなれんぞ」

「その声はクラウドさんって、下でしたか」

「お前は何をやっているんだ！！」

ドカツ、バキツ、ゴスツ（ナギがクラウドを殴る音）

「はは、ていうかその後ろのタマってホントに猫なんですか？

どうみてもトラですよね……トラを野放しにするのは危険なのは？」

すると、タマが正登の方に顔を向けた。

「ふふ、どうやらタマの機嫌を損ねたようだな

タマはお嬢様、峻様、マリアにしかなくついていないバカ猫！！

暴言を吐いたものは抹殺されるのだ」

「ということはクラウドさんにもなついていないってことなんですよね？」

ではクラウドさんも危険なのでは……？」

「そ……そんなことはないよなあ、ターマ」

ドコッ！タマの爪がクラウドの顔にヒットし、クラウドは壁まで吹っ飛んだ。

タマは正登に目を向けるといきなり襲い掛かってきた。

するとナギが

「こら！タマ部屋の中で暴れるな」

と言うとタマは正登の手前でとまり急におとなしくなった。

「あ・・ありがとうございました」

「まったくお前は三千院家の猫として少しはわきまえろ！！」

遊ぶなら外でやれ！！！」

と言うとタマは正登を口にくわえて窓をやぶって外に出た。

正登はタマをつかむと

「クソ、調子に乗るなあ」

そのままタマを投げ飛ばし、着地してこう言った。

「いくらお嬢様のペットだからって調子に乗るなよ！！」

それをみていたナギが言った。

「正登ならタマの相手してやれそうだな」

「それはどうでしょうか？姫神・綾崎以来何人の執事候補がタマに敗れてきたことが」

「正登ならできるさ！」

「ほう、そんなに自信があるならタマに勝てなかったら執事クビと  
いうことで」

「いいだろうただし正登は負けんぞ！」

「（えゝ！？素手でトラに勝てなかったらクビなんですか？）」

正登は心配になってナギを見たがどうみても勝つとしか信じていない顔をして

こつちを見ていた。

「（お嬢様達のペットだから真剣はつかえないよなあ・・・

ま、いっつか拾ってくれた命だし1つこは言って碎けるか）

いくぞゝ、うおおおお」

「お嬢様？1つ気になっていたんですが、あそこって確か・・・峻  
様の家庭菜園場では…？」

「ああ！！！」



さて場面はかわってマリアのいる厨房。

「さて、朝食の準備も出来ましたし。峻の花にでも水をあげて掃除でもしますかね」

と言うとマリアは峻の家庭菜園へとやってきた。

マリアも昔菜園をもっていたが何度も壊されて（特にタマ）やめてしまったらしい。

「きれいに咲いているといいんですけど…」

マリアが見た場面それは正登が必死に抵抗する中頭をくわえて暴れているタマの姿だった。

スパアン、マリアが振り下ろしたほうきがタマの頭にクリーンヒット。そして

「タマ？あなたはなにをやっているんです？ここには峻がとても大切にいる

花があるのでここでは絶対に遊んではダメとあれほど…」

目の前には見るも無残な家庭菜園が広がっていた。

「ああ、峻がとても大切にしている花が…」

すると運悪く峻がこちらに向かってきていた。それに気づいたマリアは、

「峻、なにしてるんです？」

「ん？花を見にきたんだ。マリアが丁寧にやってくれているから最近は特に

きれいだしな」

「峻、それはあとにしてさきに朝食を食べましょう」

「え？なんでいいじゃん菜園にタマが正登を引っ張り出して遊んでたわけじゃないだろう？」

その言葉にあきらかにピクツと小さく反応したが、峻はその動作を見逃さなかった。

とめるマリアごと無理やり菜園の近くまでやってきた。菜園を見た瞬間峻は固まった。

その隙にタマは逃げようとするが、峻は

「タマ、これはお前がやったのか？…それとも上の2人が素手でタマに勝てなかったら

執事失格でクビだとか言っただけしかけたのか？」「驚異的洞察力」

「いや、何を言ってますか！！！」

「そ・そうだよそんなことあるわけが……！！！」

「どうなんだ正登？」

「へ？だいたいそんな感じですけど……」

「そうなのか？じゃあ正登の手当てが終わったらすぐそっちに行くから

少し朝食は遅れるかもしれないが……ちょっとそこで待っていてくれな  
いか？」

「イ……イエッサー……」

「うん、まだお腹すいてないから大丈夫だよ……」

「でもすまんあの2人にはキツく言っておくから……」

「い……いえ、そんな」

「じゃあ、さき行ってるから正登もすぐこいよ」

「はい！わかりました」

正登はタマのほうを向いて、ふうと息をはいているとタマが

「てめえはいつかぶっ殺す……！！！」

そういうとタマは去っていった。正登は思った。

「（そうか……金持ちの家のペットって……しゃべるんだ）」

その頃、ナギの部屋では……

「いや……まあだから……これで正登がタマと一緒に遊べるっ  
ていうか……」

世話ができるってわかったわけだし……」

「そしてその代償として俺が育ててきた花達は全滅と……」

「いや……だからそれはその……本当に悪かったというか……」

「ナギは必死に弁解しているが、あきらかに峻とマリアの目は冷たかった。」

すると、正登が入ってきた。

「あ、おかえり正登。な！！正登もすっかりタマと仲良くなったよな？」

「いやあ・・・しかし、おどろきですねー」

「ん？なにがだ？」

「三千院家のペットは・・・しゃべったりするんですねー」

その言葉に全員哑然としていたが

「ほらごらんさい！！あなたがムチャをさせるから

正登君がすっかりアレな感じに・・・」

「お前なにやってんだ正登が変になってるじゃないか！！！」

「正登！！！！しつかりしろ！！！」

「え！？」

「正登！！私が悪かったあ！！お願いだ許してくれ」

「ええ！？あいつしゃべるんじゃないんですか！？」

「正登！！この世にしゃべる猫などいないぞ！！！」

「これはめちやくちゃアレな感じになっていますねー」

「で・・・でもさつき本当に・・・」

「だ・・・大丈夫だ！！！！これからは仲良くタマとやっていこう・・・な！！！」

愛情に囲まれ育ったタマは、いつしか人語をしゃべれるようになったという・・・

だが！！その事実（正登以外）誰も知らない。死んでるけど一応ハヤテも知っている。

時間はかわって午前10時、正登はナギの仕事が相手の都合によりなくなっただけ

庭の掃除をしていた。すると、マリアが現れ

「正登君も仕事熱心ですね。少しは休めばいいじゃないですか」

「いえ、なにかしてないと気がすまないのです」

「まあ、それはごく立派なことですね」

「ありがとうございます。それにしても静かですね」

「そういえばナギがめずらしく自室のいますからね。でも、

なにをしているかはわかりませんが、とそろそろ出てくると思いますよ」

「おい、正登、ちよつと来てくれー」

「あら、噂をすればなんとやらですね」

「はは、本当ですね。では、いつてきます」

と言うと正登はナギの部屋へと向かった。ナギの部屋に着くと

「おお、来たか」

「で、なにかようですか？」

「うむ、この服を着てくれ」

「え？それってどうみても女物の服ですよね」

「大丈夫だサイズはあつてゐるから」

「いえ．．．そうではなく、僕に女物を．．．？」

「なぜってそりゃーお前、似合いそうだから」

「思いつきでそんなもの着せようとするのはやめてください!」

「ええい！！！！つべこべ言わず男らしくこれを着るのだ！！」

「男だったらそんな服着ませんよー……キャー……!」

「もお・・・こんなセーラー服なんて・・・どこから見つけてきたんですか？」

「いやいや……でもやはり思ったとおりよく似合っているぞ」

「そんなのちっともうれしくないですよー」

「よし！！記念に写真でも撮っておこう」

「ああ！！ダメですよこんなの撮っちゃ！！ていうかなんの記念ですか！！！！」

こんな男らしくない格好しているのを執事長に見つかったら僕クビになっちゃいますよ!!」

「は？なんだそれは」

「いえ、ですから執事長のクラウドさんが・・・

『三千院家の執事のスローガンは”執事とは漢らしくあれ!!”三千院家の執事たる者いかなるときも・・・紳士として男らしくふるまわなければ

なりません。男女平等の時代だからこそ、あえて男らしさを追求する!!」

それが三千院家の執事の姿!!だから執事たる者普段から男らしい行動を

心がけるように!!それができないのであれば即刻やめてもらいますよ!!!!」

つて言ってたんですよ!!!!」

「ほー。クラウドがそんなことを・・・」

「だからこんな女の子みたいな格好をクラウドさんにみつけるわけにはいかないんですよ」

「まあ、いいじゃないかとでも似合ってるんだし・・・」

「良くないですよ・・・!!だいたいそうでなくてもこんな格好・

マリアさんにだってもし見られたら恥ずかしくて死んじゃいますよ!!!!」

「あーそうですか・・・でも死なれるのはちょっと困りますねー」

正登が振り向くと、マリアが立っていた。

「マ・・・!!マリアさん!？」

「お2人でなにをしているのかと思えば・・・」

「ち・・・っ!違うんです!!これは

お嬢様がムリヤリ・・・!!」

「いやあ、正登がどうしても着たいっていうから」

「そんなこと言ってませんよ!!」

「心配なさらなくても、正登君に女装癖があるとは思ってません。」  
「あ……ありがとうございます」

「それにしてもまったくあなたって子は……」

「だって正登ならハヤテと外見が似てるから似合うと思って……」  
「似合うと思ったからってセーラー服なんて着せたんですか？」

「そうですよ！僕は一応男なんですよ！！（ふう、マリアさんが来てくれて

助かったな）」

しかし、これが間違いだった。マリアは、おもむろにクローゼットに近づいていくと

「正登君にはこっちのフリフリが絶対似合うに決まってるじゃないですか！！」

「（マリアさん！！なに紹介しっちゃってんですか）」

正登は心の中で叫んだ。

「じゃあ、こっちのスカート（赤）なんてどうかな！？」

「えー、でもこっちのスカート（ピンク）の方がかわいくないですかー！？」

「あー……もしもしー……」

「ん？少し待つてろ。今いいの見つけてやるからな」

「（いかん……2人のノリが完全に女子高校生になっている……！こ……このままでは僕の貞操大ピンチ……！）」

正登は1歩1歩ゆっくり気づかれないよう逃げ出した。

しかし、そんな簡単に逃げれるほどの小説は甘くないのだ……！

なぜかはしらないが下においてあったPSPを踏んでしまいその音がナギとマリアに

ばれてしまったのだ。

「どこにいくのだ？」

「セーラー服のままでは屋敷の中を歩き回れませんわよ？」

「いや……でもほら……仕事とかしないと……」

「うむ、感心感心。でもこれも仕事ってことで」

「こっちの服もきてみませんか？」

「あ．．．う．．．キヤー．．．．．」

「うう．．．ひどいですよこんなの．．．」

「．．．．．」

ナギとマリアの2人はしばらく黙っていたが

「（こ．．．これは．．．）」

「（シヤレになっていませんわ．．．）」

「もともと素質はかなりあるとは思っていましたけど．．．」

「まさかこれほどまでのものとは．．．」

「もー、こんなのクラウドさんに見つかったら本当にクビになっちゃうじゃないですかー」

「なーに心配するな。ていうかそんな目で見るなって．．．」

それに．．．タマだってなー、すごく似合っていると思うだろう？

「！ー！」

「そんなこと言われても．．．これスカートの中がスースーしてますし．．．」

タマはなにを思ったのか正登に近づいていった。

「タ．．．タマダメだぞ．．．」

お前がいくら動物だからってそんな少年誌ではやれないようなことを．．．」

しかし、タマは正登に襲っていった。

「ノー！ー！．．．バ．．．バカ！ー！タマ！ー！服は部屋にあるっていうのに

こんな服でウロついたらクラウドさんに．．．！だっ．．．

」

正登を木に押し付けるとタマは上に乗った。

「わゝバカバカ！ー！お前三百キロもあるのに．．．！ー！

上に乗ったら死んじゃうって!!」

「かわいいメスと勘違いして襲っているのか、それともかわいい男の子だから襲っているのかで、今後のタマの教育方針を全て変えていこうと思うのだが……」

「まー、言ってる間に正登君は死にそうですけどね」

「……ったくこの……も……!!」

正登はタマを首投げするとそのまま地面へとおもいつきりたたきつけた。

「ふんだ……!!いくらお嬢様達のペットだからって調子にのるな!!」

このバカトラめっ……!!」

「おお、前回結局倒せなかったタマを一撃で……スゲー」

「300キロを首投げ……やはり外見は女の子でも中身は鬼ですわね」

正登は考えた。

「(しかし、このままグズグズしちゃいられない……」

早く部屋に戻って着替えないとクラウドさんに見つかってクビに……」

すると、近くから声が聞こえた。

「やー、それにしても今日はいい天見だな」

こんな日は庭の花にオリジナルの花言葉をつけて回るに限るな」

「(ク……クラウドさん!?!い……いかん……こんな格好

見つかったら……クビとか以前に人として生きていけない

……)」

正登は逃げようとするがこの小説はさきほども説明したように甘くないのだ!!

木の枝を踏んでしまえばれてしまったのだ。

「誰かな?この三千院家の屋敷を無断でウロつく変質者は……」

」



「（『正登です！』とは名乗れないよなあこの姿では・・・となれば・・・）」

正登は全速力で逃げた。

「ふ・・・なめられたものだ・・・この屋敷の中で私から逃げ切れる

つもりだとは・・・成敗してくれる！！！」

「キヤーーーーー！！！」

「おお、さすがクラウド・・・正登が動きにくい格好しているとはいえ・・・」

「正登君のスピードについていってますわ・・・それより

正登君を助けなくていいんですか？」

「うむ！マリア行くぞ！！！」

「（い・・・いかん！！この服じゃ速く走れない！！このままじゃ追いつかれる！！

かくなる上はこの布で顔をおおって・・・クラウドさんを迎撃するしか！！・・・」

でもこれじゃ・・・前が見えないなあ・・・）」

ええい！！人間いざとなれば眠れる力が目覚めるはず！！自分の目ではなく・・・

心の目を信じるんだあ！！！」

さすがにそれはこの小説の中では無理な話だ！

「クラウドスキーーーーック！！！」

クラウドにやられた正登はもうダメだと思った。

「死ねえ！！この賊めが！！！」

クラウドがトドメをさそうとした。しかし、クラウドは女装した正登に好意を抱いたようだ。

そのままボーーーーーッとしていたが今にも襲ってきそうな顔をしていた。

「マズい、このままじゃ正登がやられてしまう・・・マリア急げ！！！」

しかし、マリアが攻撃する前にクラウドが吹っ飛んだ。

「おっさんがなにときめいてんだ！！いいかげんにしろ」

それは峻だった。峻はこちらに近ずくと手をだした。

「ほら早く起きろ正登」

「え？何で分かったんですか？」

「女装しててもお前は分かるよ・・・それにしても俺がいない間になにやってんだお前ら」

と言うと屋敷の近くからみていたナギとマリアを見た。

「ごめん峻！！その・・・つい」

「ごめん兄さんでもついやっちゃたんだ」

「まあ・・・いいけど」

その言葉に安心したのかナギとマリアが近づいてきた。4人は屋敷に中へと戻っていった。

マリアは正登に真新しい服を渡した。それは執事服だった。

「これは執事服ですよね」

「ええ、私が昨日サイズを仕立て直したものなのですが・・・」

「え？これはマリアさんが・・・？」

「ええ、ではさつさとクラウドさんが起きる前に着替えてください。

それと着替え次第部屋の掃除でもやってもらおうと思います。」

「はい！！いやゝそれにしてもピッタリですね。見てくださいどうですかお嬢様

マリアさんうまいですよね・・・って、あれ？」

「悪かったな！！どうせ私にはできないよ！！」

そういうと、ナギはささつと向こうへと歩いていきました。

「あの・・・なんか僕しました？いきなり冷たくなった気がするんですけど・・・」

「いや・・・どちらかというと・・・」

「あれは暑くなりすぎている気がするんだけどな・・・」

「ま！！なんにしても！！失った信頼は・・・仕事で取り戻してみせますよ！！」

「え？あの・・・」

「あー！これ掃除の道具ですね！！まかせてください！！  
まずはあっちの部屋からピカピカにしてみせますから！！」

「なにやらこつちも・・・」

「熱くなっているなあ・・・」

残った2人はというと・・・。

「とりあえず・・・部屋に戻っててください。なにか飲み物をもって  
いきますので」

「おお、そうだな。それと紅茶かコーヒーでな」  
とりあえず軽く流すことにした・・・

それから30～40分後、峻とマリアはある部屋へと向かっていた。  
その部屋とは来客者や屋敷の人達がよく休むところだ。この部屋は  
ナギやマリア、峻、正登、ヒナギクの部屋から近いためよく皆で集  
まることが多いのだ。

なぜその部屋へ向かっていたかと言うとそこは普通の部屋より大き  
く、

ビリヤードなどのゲームがあるから峻がマリアにやろうと行ってき  
たからだ。

その途中峻とマリアは話をしていた。

「マリアとこうやって2人で話すのも久しぶりだな」

「ええ、いつもならナギやヒナギクさんがいましたからね」

「ああ、しかもうマリアも二十一歳になったんだな」

「えっと・・・それは・・・私が実際の年齢より老けて見えるってこ  
とですか？」

「いや違うよ。マリアはいつまでたっても歳を取らないなあと思っ  
ただけだよ・・・」

「あら、そうありがとう・・・峻」

そんなことを言ってる間に部屋へと着き、中に入るとナギがいた。

「あ！ナギなにやってるんです？」

「マリアが声をかけていたがなにか考え事をしているのか全然気づく様子がない。」

「（……さっきのはよくなかった……さっきのようなことであの態度では、いくらなんでも心がせますぎる……）」

しばらく、ボーボーッしていたがようやく自分に声をかけられていることに気づいた。

「ん？なんだ兄さんとマリアか……」

「やっと気づきましたか……ところでなぜこんな所に？」

「この時間は書斎かと思ってましたけど」

「ん？ああ……調子が悪くて……ところで正登は？」

「元氣にお掃除をやっています。とてもやる気に満ちあふれていますわ」

「そうか……書斎には近づけさせないでくれよ。あと……私のこと、なにか言ってたか？」

「お嬢さまの信頼を得るためにガンバルそうです。」

「まあ、なにか思うところがあるのなら……直接お話しになった方がいいと思うけどな……」

「そ……そうだな！まずはお互い話をするのが大事だな！」

「はい！！」

「じゃあちよつと正登のところに行ってくる！！」

「やんわり話をしてくるんですよ……」

「ナギはどうやらハヤテ似の正登を好きになったようだな」

「ええ、そうですね。今度こそハッピーエンドになればいいんですけど……」

そんな話をしていると、

「あの！！マリアさん！！一部屋、掃除が終わったので見てもらえませんか！？」

「ーって2人ともどうかしました？」

「いえ・・・とことん噛み合わない人達だなあ・・・と」

「でもまだ1時間も経ってませんけど・・・」

「はい！！とりあえず手順を確認してもらいたくて！！」

「手順って・・・え？」

ピカピカキラキラ

「なんだか・・・すごくキレイね・・・」

「そうですか！？ありがとうございます！！」

「（細かいところまで・・・とてもいいね・・・）」

あら？これは・・・」

「はい！！そちらの取っ手は銀製だったのでシルバードスターを使  
って磨きました」

「え？」

「こいらの銅像は真鍮ブラシで汚れを取った後、薄い中性洗剤で洗  
浄・・・

水気を取ってワックスで仕上げました。」

カーペットはウール製のキリムだったのでお湯を使わず、冷水に頭  
髪用洗剤と塩を

加えて、色落ちしないように気をつけて軽く・・・って、  
あの僕、なにかマズいことを？」

「いえ・・・素直に驚いているんですよ。ていうか感心しました。

正登君・・・お掃除とても上手なんですネ」

「え？そうですか？ありがとうございます！！」

高級品は特別な手順があるのかも、って不安だったんですよ」

「いえ、全部正解ですけど・・・よくご存知でしたね？そん  
なこと・・・」

「いや、自分でもなんでかわからないんですが、知ってたんです  
よね」

「ふんそうなんだ。そういえばハヤテも掃除上手だったな」

「ハヤテさんも得意だったんですか」

「ええ、ハヤテ君は9歳の頃から年齢偽って、清掃のバイトで

親の酒代稼いでいたらしいですよ」

それを聞いていた正登は思った。その少年の端々に笑えない苦労がにじんでいるなあと

「では正登君、その調子で他の部屋もお願いできますか？」

「はい！！喜んで！！」

「（うれしいなあーほめられちゃった！！よしがんばって掃除するぞ〜）」

「正登の奴、すごいな」

「ええ、本当ですねまるでハヤテ君みたいですね〜」

「そうだな、それよりナギの書斎のこと言い忘れてたけど・・・大丈夫か？……………」

「あ！？そういえば・・・でもまあ大丈夫でしょう・・・」

「そうか？なんか嫌な予感がするんだがな・・・」

「大丈夫ですよ〜」

とマリアは言ったが、峻の予感的中しようとしていた。

人に誉められた少年は、少し・・・いやかなーり調子に乗っていた

「（よしこのまま屋敷中を掃除して・・・もっとマリアさんに誉めてもらおう！！）

そうすれば、きっとお嬢さまの機嫌も良くなるに違いない！！《す

ごいや正登は！！》

《いやあゝ、当然ですよ》・・・そうだ！！こんなふうになるさ！！よし

そのためにはまず・・・！！この迷路のような屋敷の構造を把握しなくては！！）

それから、１０分後・・・

「（うゝん・・・すっかり迷子だ・・・しかし本当に広いなあ・・・いったいいくつ部屋があるんだろう？そしてまた・・・新しい部屋が・・・）」

おもむろに部屋の中へと入っていく。

「あ・・・でもここは結構・・・人の気配がする・・・」

（ん？なんだこのノート・・・お嬢さまの学習ノートかな？）・・・

「な・・・こ・・・これは！！」

それはナギの漫画だった。ナギの漫画は5年たってもまったく進歩していなかった。

「（絵日記？い・・・いかん！！こんなプライベートなものをみては！！」

こんなこと・・・！！こんなことお嬢さまに知られたら・・・！！」

「

「おい・・・人の部屋でなにを勝手に見ている・・・」

「お嬢さま！？いえ！！こ・・・これはその・・・！！」

「あ！！そ・・・それは私のマン・・・」

「だ・・・大丈夫です！！ほとんど読んでいませんから・・・お嬢さまのこの絵日記は！！・・・あ・・・あれ？」

「え・・・絵日記・・・だと・・・」

「はい！！え？あれ？」

「こ・・・この・・・バカア！！」

「お・・・お嬢さま！？」

「人の気持ちも知らないで！！正登のバカ！！バカバカバーカ！！もう出て行けー！！」

「あんなに怒らせてしまつては・・・もう会わせる顔がない・・・

（あれは・・・よっぽど大事な絵日記だったのだろうなあ・・・）

さようなら僕の平穏・・・短い間だったけど・・・ありがとう・・・

「

そついうと、正登は去つていった。それを見ていたマリアは、

「ナギ？いいんですか？」

「？なにが？」

「正登君、ホントに出ていってしまいましたけど・・・」

「は！？いやいや！！私は部屋を出て行けと言っただけで、屋敷を出て行けなんて言つたつもりは・・・」

「あゝ．．．そうですか。でも外は寒そうですね．．．  
こんな寒空の下、帰る家もないのに追い出されたら．．．．．  
さぞかし辛いでしょうね．．．」

「わっ．．．私は部屋を出て行けと言っただけだ！！それなのにな  
にを．．．！！」

「だいたい出て行けと言われたぐらいで本当に出て行く奴がいるか！！  
まったく．．．あの根性なしめ！！それに掃除とはいえ、人の部屋に  
勝手に入るなど．．．．．怒鳴られたって文句は言えまい！！」

「まあ、ブチ切れたホントの理由は部屋に入られたことよりも．．

」

「せっかくの自信作を『絵日記』よばわりされたことが大部分を占  
めてるように

感じるけどな．．．」

「そもそも自分の大事なものをきちんとしまうクセをつけないから、  
こんなことになるのですよ？」

「日頃から部屋の掃除はマリアまかせ。着ていたものは脱ぎっぱな  
し。

身の回りのものくらい自分で整理整頓するクセをつけなさいと  
いつもあれだけ言っているのに．．．」

完全に説教モードに入った2人に対しようやく自分のした行動を反  
省し始めたナギであった。

「それにあれは正登君の失敗というより．．．ちゃんと注意しなか  
った

私の失敗ですし．．．いいんですか？．．．．．このままで？」

「．．．．．」

「まあ．．．でもお嬢さまがそこまでおっしゃるのですから．．  
仕方ありません

正登君のことはこのまま忘れましょう！！」

「え？」

「元々正登君はお嬢さまが独断で雇うと決めただけの人．．



そのお嬢さまが用なしというならもはや引き止める理由もないですし……」

「え？ いや……！？ それはその……！！！」

「正登君のことキライになったのであれば、むしろこのままのほうが……」

「やー！ だからキライになんかー！」

「なんか？」

「……ま、とはいえ正登は恩人だ。恩人を見捨てるよ  
うなマネ……」

三千院家の人間として……するわけにはいかん！！」

「右と言えば左。左と言えば右」

「……なにか言ったか？」

「なにか聞こえてますか？」

「でもどうやって正登君を探し出すんだ？」

「そうだ、それが問題なのだ……とりあえずこの周辺を捜そう  
クラウド、SP達を至急配置しろ。正登をならす見つけ出せとな」

「……かしこまりました少々時間をください」

「ふー……さてと……では、マリア・兄さん後は頼む」

「は！？」

「まさかないとは思うけど……今さら『ちよつと言いすぎだな』  
とか思っ……」

けど、怒鳴りつけた手前会いつらくて……それでマリアと俺に行  
けとか

言っているのか？」

「……」

「お嬢さまは正登君の主ですよ？」

「……じょ……冗談だよ冗談！！ 私と一緒に  
行くに

決まっているだろ！？」

「……ですよね」

「よし、いくぞ」

その頃、正登はというとなぜか九十九里浜まで来ていた。

どうやってこの短時間に100キロ離れたところまで行けるかと言う疑問は置いておこう。

「ふう、これからどうしようかな。どうせなにもすることないよなあ」

そんなことをつぶやいているとき天使と悪魔が現れた。

「正登！お前はお嬢さまに悪いことをしたんだぜ」

だからそれを償って死ぬんだ」

「ダメですあなたは死んではダメ。せつかく拾ってくれた命を無駄にしているじゃない」

しばらく言い争っていたがだんだんと悪魔の意見のほうが強くなつてゆく。

しかし、天使の一言により情勢は一変する。

「あなたはお嬢さまになにかしてあげました？なにもしてませんよね・・・」

いいんですか？救ってくれた命を無駄にして・・・

あなたの人生はそんなに小さいものなんですか・・・

お嬢さまの願いはあなたにそばにいてほしいだけなんですよ・・・

この言葉に正登は納得したのか再び屋敷の方へと歩いていった。

その頃、ナギ達は正登を探していた。

まあ、正登は九十九里浜にいたから見つかるわけもないんだが・・・正登を探している時、ある人に声をかけた。

「あの・・・ちょっといいですか」

「はい？なんでしょうか？」

「えーと、この子を探してるんですが・・・知りませんか？」

マリアはそういつと正登の写真を見せた。すると、向こうの人が聞いてきた。

「あの・・・！！この子の写真はいつ・・・！？」

「え！？えーと昨日ですけど・・・なにか」

「私はこの子の姉なんです！」

「え？ということはあなたは堺詩織さんですか？」

「ええ、そうです。あなた方は？」

「私はマリア、こちらは正登君を執事に雇っていた三千院竣と妹のナギです」

「そ・・・そうなんですか？ところで正登がどうかしたんですか！？」

「ええ、それが屋敷を出て行ったきり・・・」そんなことより早く行くぞ！」「

マリアの言葉を制止しさつさといってしまうナギであった。

そのあとをマリアがいそいで追いかける。それを見ていた峻が

「いや、すみませんね。でもナギは正登を気に入ってますして

今はそれしか頭にないんですよ・・・あッ、あなたも来ますか？」

「ええ、お願いします」

「では、いきましよう」

正登はもう屋敷の近くまで来ていた。正確に言えば負け犬公園のところまで来ていた。

公園のところまで来て再び正登に戸惑いが訪れた。

自分はこのまま屋敷にもどってなんにもなかったようにしているのだろうか

いろんな思いが交錯してなかなか屋敷へとむかわない自分に腹を立てながら、

公園のベンチに座っていると、ナギが声をかけてきた。

「ようやく見つけたぞ！正登」

「あ・・・お嬢さま・・・」

正登は心配になった。まだ怒っているのではないかと・・・それを考えると、

なかなかナギの顔を見れなかった。”まだ怒ってるよな　やっぱり戻らなかった方が

良かったのかな・・・”そんなことを思っているとナギが正登の顔を強引に

自分の方に向かせた。正登はその行動に驚いていたがナギの顔を見て、さらに驚いた。

怒っていると予想した自分に反し、ナギは笑っていたからだ。

「心配したんだぞ正登！」

「お・・・お嬢さま・・・？まだ怒ってませんか？」

「いや怒ってない。私は心配だったんだ・・・ごめんな・・・正登」と言った瞬間、ナギは正登に抱きしめられていた。

「あ・・・ありがとうございますお嬢さま・・・」

「うわ・・・お前こんなところを兄さんとマリアが見てたらどうするんだ！？・・・」

で、もう見られてるではないかあゝ！！」

その様子を聞いていた正登も急に恥ずかしくなってナギから離れた。しばらく2人は顔を赤くしていたが、ナギが

「ほら！正登早く帰るぞ！！」

「待って、ナギ。正登君も待って。もういいですよ」

マリアがそういうと詩織が木の影から現れた。

「正登、ごめんね、私が悪かった。あやまりたいの。」

もちろんあなたの今この状況だから家には連れて帰らないわ・・・でも1つ謝らせて、ごめんね・・・」

「いらないよ、そんな言葉・・・お嬢さま帰りましょう」

「お！？・・・おう、兄さんとマリアも急げよ」

「いいんですか！？引き止めなくて・・・？」

「もう・・・いいんですあの子は怒ってる。ではまた会えたら会いま

しょう・・・」

と言うと詩織は帰っていった。

こうして長かった1日が終わった・・・。

## 14話（後書き）

皆さんお久しぶりです！最近忙しくて更新が遅れました。すみません。

今回は、三千院家の1日ということでしたが長くて読みづらかったらすみません。

最初の方はコミックス第1巻を下敷きに少しアレンジをしてみました。最後の方は自分で考えたオリジナルだったんですが、いまいちうまくいかなかった・・・

まあ、次回も読んでみてください。

## 15話

いろいろあった10月23日、その次の日のこと。

昨日の出来事があったせい、疲れているのではと踏んだナギは正登に休養を出していた。正登は最初嫌がっていたがナギがどうしても言うので

休むことにした。しかし、正登は休養をもらったものの何をすればいいか分からなかった。

が、せっかくの休みなので学校へ行くことにした。だが行く途中峻とヒナギク

にとめられた。なぜかと思ったが峻に言われた。

「おい、お前今日は学校ないぞ」

「え？ないんですか？」

正登は一瞬驚いて聞いた。

「ええ、今日は帰ってきたいいかげんな理事長の理不尽な都合で休みなのよ！」

「まあ、そう怒るな・・・」

怒るヒナギクに峻がなだめている。するとマリアがやってきてこう言った。

「では、お金をあげますので携帯でも買ってきてはどうですか？」  
と言うとマリアはお金を差し出した。中身は30万だった。

「どうもありがとうございます・・・ってこれ30万円も入ってるじゃないですか!？」

「それは今日せっかくの休みなのでどこかで遊んできてもいいようにといれたんですが」

「ええ!？それは入れすぎでしょう」

「まあ、あまっても困るんで全部使ってきてください」

「はあ、わかりました(ずいぶんなれたけどあいかわらず金銭感覚がないな・・・)」

正登はそう思いながらいこうとしました。

「ではもういきますね」

「あ、ちよつと待ってください。帰りにでもいいんで紅茶の茶葉をこの紙に書いてる

店に買いにいつてくれますか？そちらの店の方にはもうお金も払ってますし、

向こうの方でいつも買っていますから種類は分かっていますので

”三千院家の者です”と言えばくれると思うのでお願いできますか？」

「はい！！わかりました。それぐらいならいいですよ」

「そうですか、ありがとうございます。あ、それとこれから出かけるときは

この服を着てもらいますよ。まあ夏は無理でしょうけど・・・」

「あの・・・このコートって・・・もしかして、カシミアでは・・・？」

「あら？そうですけどよくわかりになりましたね」

「そりや・・・手触りが・・・でもいいんですか？もし外で汚れたりしたら・・・こんな高そうなコート・・・」

「あはは、何言ってるんですか？正登君！！

高そうなコートではなくて、高いコートですよ」

「（・・・そこ訂正する場所なんですか？マリアさん）」

「そのコートは特別に作ってもらった超高級なものです。

1着300万はくだらないので・・・絶対に汚さないでくださいね」

「イ・・・イエッサ・・・」

「いやー、それにしてもこんな高いコート緊張するな」

（まあこのコートもだけど30万も持つてるし、お金をなくすとか、コートを汚すようなことはないと思うけど・・・やはり少しは気をつけないと・・・」



その時、正登の目の前にペンキが落ちてきた。

うわっと正登は驚きながらも飛び散るペンキをなんとかよけた。  
上にいた人が

「あゝ、すみませんね。カシミアの超高級コートについたら  
絶対落ちないタイプのペンキ落としちゃって・・・」

「あ・・・はあ・・・まあ・・・気をつけてくださいね・・・」

「ああ！！そんなところで急に方向転換したら・・・」

カシミアの超高級コートについたら絶対落ちないタイプのそばつゆ  
が！！」

「うわ！！」

正登はそばつゆとそばをさっと手にとり濡れるのを防いだ。

「おお、すまない！！危なかったな少年！！」

「い・・・いえ・・・気をつけてくださいって

菅原さんじゃないですか！！」

「ん？おお、正登！！見慣れない服着てたから見間違えたぞ！！

お前どうしたんだ？そんな服着て・・・」

正登は菅原さんに今までのことを話した。

「ん・・・そりゃーヒドいめにあつたな」

「いえ、でも今は三千院家で執事をやっていますから楽しいですよ」

などと会話をしていると突然大きな音がしたと思ったら、

「うわー大変だー！！カシミアの超高級コートについたら絶対に  
落ちないタイプの

スミを吐くタコに乗せた車がー！！」

「！！やばい、これはやばい！！」

正登はそう言っていると、こっちに向かってくるタコがコートに当たらない  
ように気をつけて

左足でタコを蹴って荷台に戻し、傾いていた車を元に戻した。

正登は思った。

「いかん・・・なにやら汚してしまいそうな予感がする。」

これはとりあえず他の場所へ移動しよう・・・」

正登は他の場所へ移動したが、どこかに行こうとしたとき  
運悪く潮見高校の友達に会ってしまった。

「おおー、正登じゃーん。久しぶりー」

「あ、皆！！どうしたの！？」

「おお、今日な学校休みだったんだよ。こんなところで話すのもなんだから

あのレストラン行こうぜ！！」

「あ・・・うん・・・」

嫌な予感したがとめられない正登であつた・・・。

案の定いろんなものを食べて、お金は正登が全額払うことになった。

現在のお金：20万円。

「なんか一気に10万円も減ったけど残りは大事に使わないと・・・  
とりあえずどこかにいくか・・・。そうだ！！九十九里浜にでもい  
くか！

あ、その前に携帯買いにいかなくちゃ！！」

そう1人でつぶやくと携帯を買いにいった。

その30分後、正登は携帯の機能を試していた。

「せっかくだし、いいの買っちゃった。

へー、今時のはデジカメよりきれいに撮れるんだ。ふーん音楽も聞  
いたりできるのか」

それにアドレス帳の件数が千件だつてこりやすごいや。

でも僕のとて男子のより女子の方がアドレス多くなりそうだな」

現在のお金：5万円

「よし！九十九里浜にでも行ってみるか。」

と正登は言つと九十九里浜へ向かった。

その頃、ここは三千院家の屋敷の近く。そこに3人組の男達がいた。

ずっと三千院家ほうをむいていた。

「兄貴、あそこが例の三千院家ですか!？」

「ああ、そうだ。ここのやつらは前に俺の部下をコケにしゃがった許さねえ。八つ裂きにしゃがる。」

「そして、金を奪うんですね」

「ああ、そうだ。みているお前ら、もう俺の頭の中じゃ完璧な作戦が出来上がってるぜ」

こいつらは誰なのか？はたしてなにをしようというのか？完璧な作戦とは？

バカなやつらの作戦ほど怖いものはない・・・。

そんなことが裏で行われようとしているのはつい知らず

正登は九十九里浜へと来ていた。

「うーん、気持ちがいいなあ。こういう日って1番好きだなあ。リラックスできるしね!」

正登はしばらく海を見ていたがなにやら自分に声をかけられていると気づいて

周りを見た。しかし、そこには誰もいない・・・。正登はまた海の方角に向きをかえて

眺めていると、また聞こえていることに気づき今度は周りを見てもいなかったの

周りを探してみることにした。しかし、どこにもいないので、また戻ろうとした。

その時、ふとコートのポケットに手を入れると、なにかボタンみたいなものが見える。

「ん？なんかはいつてるな・・・なんだこれ？」

それはボタン型の丸いものだった。しかもなにか声がしている。

正登は耳を近づけて聞いてみると、マリアの声がした。

「マ・・・マリアさん!？」

「あ、ようやく聞こえましたね。正登くん」

「なぜ、マリアさんが？ていうかこのボタンみたいなのなんですか

！？」

「それは盗聴器です。それよりナギが大変なこと・・・に」

「盗聴器ってなんですか？しかもお嬢さまになにかあったんですか？」

「え・・・ナ・・・が・・・た」

「え？なんですって！！聞こえませんがとにかくそちらに向かいま  
す！！！」

正登はすぐに屋敷へと戻った。屋敷に戻ると玄關に峻がいた。

「峻さま、一体お嬢さまになにかあったんですか？」

「正登、こっちへ来てくれ」

「はい！！峻さま」

峻に連れられ正登はナギの部屋へと向かう。ナギの部屋には  
泣き崩れるマリアを支えるヒナギクがいた。一体なにかあったのだ  
ろうと思っていると

峻がこう言った。

「実はナギが熱をだして倒れたんだ。医者に見てもらったが原因が  
分からないらしい。」

俺もまだナギを見てないからなにかはわからんがな」

「では一緒に見てみましょう」

「ああ、そのつもりだ」

と言うと正登と峻はナギが寝かされてる部屋に入ってしまった。  
入った瞬間、正登は気づいた。

「（な・・・なんだこの薄暗く漂っている空気・・・いや雰囲気は）  
」

そう思いながらナギの前に着くと、しばらく見ていたが峻が聞いて  
きた。

「どうだ正登、なにかわかったか？」

「ええ、確信はありませんが」

「本当か!？」

「あくまでも確信はありませんがね。それより確か・・・鷺ノ宮さんって除霊退治ができましたよね」

「ああ、できるがそれがどうした？」

「鷺ノ宮さんと呼んでください」

「なに?どういうことだ」

「まだ確信はありませんが、とにかく理由は鷺ノ宮さんがきてから話します」

それと一旦ここから出ましょう」

「ああ、そうだな。わかった」

それから数分後、電話をかけていた峻が戻ってきた。

「正登、伊澄はすぐにこちらに来るそうだ。それと咲夜と和哉も一緒にいたから」

一緒に来るそうだ」

「では紅茶は買ってくるの忘れたので、僕がコーヒーを入れてきます。」

何分ぐらいで着くっていつてました？」

「あと5分ぐらいで着くそうだ」

「分かりました。ではコーヒーを入れてきます」

その5分後伊澄達が到着し、正登が用意したコーヒーを飲んでいた。

「で、なぜ私を呼んだんですか？」

「それはナギの友達やからやろ」

「それもそうですが、ちょっと見てもらいたいものがありました・・・。」

峻さま、鷺ノ宮さんこっちに来てください」

「ええ、わかりました」

と言うと正登は伊澄を連れてナギが寝かされている部屋へと向かった。

「えーと、私だけをまず来させたということは霊関係の方ですか？」

「ええ、まさしくそうです」

「なに？ナギに霊が憑いているいうのか」

その言葉に峻も過敏に反応した。

風邪でも心配しているのに霊が憑いているとなればなおさらだろう。

「まあ、まだ確信はないので・・・分かりませんが、

とりあえず見てください」

そういうと、3人は部屋の中へと入っていった。

入ってすぐナギの前に行くと、伊澄は

「これは間違いなく霊が憑いてますね。それもかなり強力な悪霊です」

「そうですか・・・。では除霊できますか？」

その言葉に伊澄は頷き札をだして除霊を試みたがなんの変化もなかった。

「すみませんかなり強い霊のようですね。今持っている除霊の札では無理みたいです。しかし、もう夜遅いですし除霊の続きは明日にしましょう」

「ああ、そうだな。そういえばもう9時なんだな。そろそろ戻るか。それにしても、これをマリアが知ったらどうなるんだろっな・・・」峻がそう言うのと、正登は確かにそうだなと思った。

マリアは風邪だと思っているのに霊に憑かれているなんて知ったらどうなることだろうと、正登はそう思いながら2人に言った。

「とりあえずマリアさんたちにはなにも言わないってことにしましょう。」

その言葉に2人も頷いた。

3人は他の皆がいる部屋に戻った。その後咲夜たちもナギのお見舞

いをして

皆寝ることにした。正登もマリアや伊澄、咲夜たちが寝るのを確認して

自分の部屋に戻ってベッドに入ったがなぜか眠れなかった。

なぜかというと正登の頭からあの事が離れなかったのだ。

一体なにがあったのだろうか？

## 15話（後書き）

久し振りの投稿です。

修学旅行や部活などであまりすすみませんでした。  
なるべくはやくできるよう努力したいです。

御意見・御感想お待ちしております



## お詫び

えゝ今回でこの小説ネタは終わりにするという方針で決定しました

なぜ今回このような処置をしたかという理由は3つほどありまして……

1つ目……

一度自分の小説読み返してみたところ

もう少しいい小説が出来るのではないかと思ったから……

二つ目……

最近なにかと忙しくその折で怪我をして1回生活のリズムを変えてみるのも悪くはないかなと思ったから……

3つ目……

今回さらに新しい小説を2つほど投稿する上で

内容をリンクさせたほうが面白いのが

出来るかと思ったから……

以上の思いから作者の勝手ですがこの小説を打ち切って新しく構成させていただきます。

（面白くなるかどうかはわかりませんが……）

なおしばらくネタを構成するのに時間がかかるかもしれないので

出来次第投稿させていただきたいと思います。

[illegible]

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7697d/>

---

執事ハヤテの日々

2010年10月10日14時57分発行